

サトシに本気を出させたら

マニャーナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケットモンスター……縮めて ポケモン この星の不思議な不思議な生き物。山に森に海に川に、至るところでその姿を見ることが出来る。人々は彼らと共に共存し、同じ時間を過ごしている。ポケモンマスターを目指す少年 マサラタウンのサトシ。相棒のピカチュウと共にバトル&ゲット。シンオウ地方で8つのジムバッジを手に入れたサトシはポケモンリーグへと挑戦する。最大のライバル トバリシテイのシンジを倒したサトシは準決勝へと駒を進める。だが次の対戦相手は伝説のポケモン、ダークライを使うトレーナーであった。たとえ相手が伝説のポケモンだろうと勝って優勝だと燃えるサトシとポケモン達。しかし、彼らに非情な現実を突きつけるべく現れたのは――。

目次

決戦前夜 集いし仲間たち (前)	1
決戦前夜 集いし仲間たち (後)	6
開幕 準決勝! ダークライ登場!	17
激突! ラティオスとラティアス!	26
スズラン大会準決勝 ギラティナの戦い!	34
脅威のポケモン レジギガス!	43
サトシの奇策! いけピカチュウ!	50
ルギア 爆誕!	56
華麗なるフォルムチエンジ デオキシス!!	62
激突! ルギアVSデオキシス!	69
降臨、アルセウス!	75
神の鉄槌	88

決戦前夜 集いし仲間たち (前)

ポケットモンスター……縮めて ポケモン

この星の不思議な不思議な生き物。

山に、海に、空に、森に、川に……ポケモンは至る所でその姿を見ることが出来る。

この少年、マサラタウンのサトシ。相棒のピカチュウと共にバトル&ゲット。

ポケモンの数だけの出会いがあり、ポケモンの数だけの別れがある。

ポケモンマスターを目指して旅を続けているサトシ。彼はシンオウ地方で8つのジムバッチをゲット。そして、ポケモンリーグへと挑戦する。そこで繰り広げられる激戦。新たなるトレーナーとのバトル。宿命のライバル、シンジとの戦いに辛くも勝利したサトシは準決勝へと駒を進めた。しかし、そこで待っていたのは伝説のポケモン、ダークライを使うタクトというトレーナーであった。

「まさか伝説のポケモンを手持ちにしているトレーナーがいるとは……」

「ほんとよね。どこでゲットしたんだろ」

「相手が誰だろうと関係ないさ」

その事実にはサトシと共にこれまで旅を続けてきたタケシ、ヒカリは眉をしかめた。だが、サトシは臆せずタクトとのバトルで使うポケモンの選出を行っている。

タクトはこれまでのバトルを全てダークライ一匹で勝利している。つまり、今のところ対策できるのがダークライのみ。ダークライとは1度出会っており、彼の使う専用技悪夢へと誘う。ダークホールにか今のところ対策は講じることができない。さらには、準決勝は6対

6のフルバトル。もしタクトがダークライ以外にも伝説のポケモンを持っているとなると、サトシにとってはとても不利な状況だった。今までの冒険で伝説や幻のポケモンの強さを目の当たりにしてきたサトシだから、ダークライやその他にも伝説のポケモンを率いてるであろうタクトの脅威はビリビリと感じている。だがしかし、それでもサトシは自分のポケモンを信じて戦う。それが今の自分にできることだから。

「よし、これでいこう！」

選ばれたのはヘラクロス、フカマル、ジユカイン、オオスバメ、コータス、ピカチュウ。

コータスを除いてはスピードが速く特殊攻撃力が桁違いに高いであろうダークライに対してサトシが取ったのは強力な一撃を持ちつつ素早さも兼ね備えたポケモン達での短期決戦であった。初手がダークライとしか分からないので、タイプがあくタイプの弱点をつける技を持つポケモンが多くなっているが、サトシが捕まえて育てた中でも選りすぐりのポケモン達である。

ようやく、明日の準決勝のポケモンが決定しあとは身体を休めるだけとなり、その際いつもの如くタケシが食事を作る。その中にはサトシのポケモンの好きな味のポフィンや木の実も用意されている。

「みんないっぱい食べるよー！」

「サトシ頑張ってね！」

「おうー任せとけ！」

ヒカリの激励にサトシは口の中に肉やら野菜を詰め込みながら返事すると、それに合わせてサトシのポケモン達も気合いの入った声を出す。持ち主に似て好奇心旺盛で前向きな彼らは誰一人として伝説のポケモンが相手だろうと負ける気は無い。

明日の試合に勝てば次は決勝戦。サトシとピカチュウにとっては夢の舞台。そこで勝利すれば彼らはポケモンマスターに大きく近づける。

「みんな！絶対勝つぞ！」

サトシの発破にポケモン達は雄叫びを上げる。

しかし、そこに水を刺すように冷徹な声が降りる。

『無理だな』

その声にタケシは聞き覚えがあった。それはサトシも同じはずなのだが、自分と自分のポケモンをバカにされたように感じた彼は音を立てて皿を置くと声を荒らげた。

「なんだって！」

突如言われた言葉にサトシとポケモン達は牙を向ける。タケシやヒカリも表情を険しくしてその声の主を探す。

「誰だ!？」

どこを振り向いてもその声の主らしき人間は発見できない。ふと上を向いたフカマルが「フカア!!」と驚きの声を上げた。

「どうしたフカマル」

フカマルの目が見開かれるその先、サトシ達は空を見た。満点の星空と月下に照らされてそいつは空に浮いていた。

「お前は…」

その姿にサトシとタケシ、ピカチュウは目を見開く。かつてカントー地方で出会った幻のポケモン ミユウの遺伝子から作られたポケモン。ヒトに作られヒトに不信感を抱き、全てのヒトに復讐しようとしたポケモンである。

『久しいな』

ゆつくりと地面に降り立ったミュウツーにサトシは「どうしてここに」と最もな質問を繰り出す。しかし、ミュウツーは何も答えずにサトシのポケモン達を見渡す。見定めるように見られた彼らはより一層敵意を剥き出しにする。ミュウツーは何度かサトシのポケモン達に目線を向けると小さく肩を落とし瞑目した。

『やはり勝てないな』

「なんだよいきなり」

唐突に告げられた言葉にサトシは困惑した。ミュウツーの口の悪さや遠慮ない言葉には慣れているため先程に比べれば怒りは薄れている。それにサトシには自信があった。たくさんの冒険とバトルを経験してきたこいつらなら伝説のポケモンにも勝てる。だがそう言ってもミュウツーは首を横に振った。

『お前のポケモンと奴のポケモン。実力に差がありすぎる』

「そんなこと」

『もう一体のダークライを見てきたお前なら分かるだろう？』

ミュウツーの問いかけにサトシ達はアラモスタウンでシンオウ地

方に伝わる伝説のポケモン デイアルガとパルキアに街を守るために立ち向かったポケモンの強さを思い出す。タクトとアラモスタウンのダークライが別個体にしても、伝説のポケモンなことに変わりはない。アラモスタウンのダークライは野生のポケモンであった。だからもしかするとタクトというトレーナーに育てられているあのダークライの方が強い可能性は大いにある。

「でも、俺のポケモンなら勝てるぜ！」

「そうよ！」

それでもサトシの自信は揺るがない。はサトシが準決勝に向けて選抜したジュカイン、オオスバメ、ヘラクロス、フカマル、ピカチュウ、コータスは主の信頼とこれまでのバトルで得た自信もあり不敵に笑ってみせる。ヒカリもサトシのポケモンだからと負けることは無いと確信している。

ミュウツーを鼻を鳴らすと指を上に向けてこちらを挑発するに手招きする。それに乗るようにピカチュウを除く5体は臨戦態勢に入る。

そしてサトシもダークライ戦の前哨戦にミュウツーとバトルすることに決めると1歩前に出た。

「よし……いけジュカイン！」

サトシのポケモンの中で技量、スピードが共に高いジュカイン。ミュウツーはエスパータイプで現在のサトシのポケモンで弱点をつけるのが少ない以上、単純な能力で攻めるしかない。皆が見守る中、サトシ対ミュウツーのバトルが始まった。

決戦前夜 集いし仲間たち (後)

ライバルであるシンジとのフルバトルに勝利し、準決勝へと駒を進めたサトシ。次の対戦相手はこれまでのバトルを全てダークライのみで勝利してきたタクト。サトシは彼に勝利し、決勝戦へと進むべく最善のパーティを組んでいた。しかしそれでも勝てないという現実を突きつけるべく、かつての敵であったミュウツーがサトシの前に現れる。

ミュウツーの言葉に激怒するサトシとポケモン達は彼の挑発に乗り、ミュウツーとバトルを繰り広げる。

「コータス戦闘不能！ミュウツーの勝ち！」

公式的なバトルでないものの審判は必要だろうと名乗りを上げたタケシだったが、今になってその事を少し後悔した。

カントー地方からここシンオウ地方まで共に旅を続けてきたタケシはサトシのポケモンがどれだけ鍛えられているか理解している。

出会い、GETの経緯、修行にバトル。ジムリーダーとしての側面を持ち合わせるタケシからしてもサトシというトレーナーは理想系に近い。ポケモンに寄り添い、ポケモンと共に歩み、共に強くなる。そして彼はジムバッジを8つ手に入れてポケモンリーグへの挑戦権を得た。はじめのジムで破られた者として感慨深いものもあり、彼の夢であるポケモンマスターを叶えて欲しいという先輩としての気持ちもある。

だが、彼はミュウツーとの戦いを目にして戦慄した。なぜならサトシのポケモンの何もかもがミュウツーに通用しなかったのだ。ジュカインの技量も、コータスの防御も、オオスバメのスピードも、ヘラクロスのフィジカルも、フカマルのパワーも。ミュウツーはその全てをへし折るようにポケモン達を無駄にいたぶらず、一撃で終わらせた。

膝をついて項垂れるサトシにピカチュウだけが彼の隣に立っている。その身体に傷はない。彼のみミュウツーとの力の差を知っていたからバトルには参加しなかった。

『分かったか。これがお前が勝てない理由だ』

ミュウツーに勝てないのにダーククライに勝てるわけがない。暗にそう示したミュウツーにサトシは歯噛みした。

「じゃあどうすればいいんだよ……！」

準決勝は翌日。これから無理やりポケモンを鍛えたところで焼け石に水。さらにはポケモン達に疲労を蓄積してしまい、より酷い結果になることはサトシでも分かる。ならばどうすればいいのかと慟哭するようにミュウツーに尋ねた。

『伝説のポケモンを扱うのは奴1人。ならば、次のみだ。お前が勝つ可能性が限りなく低いのは』

サトシとタクトとは別に準決勝を行うトレーナーはサトシと同じく普通のポケモンを使う。決勝戦ならサトシは自分達のポケモンと心置き無く、何のプレッシャーもなく戦うことが出来、さらには勝利できる可能性もある。しかし、相手が全て伝説のポケモンとなるとそうはいかない。勝てて1、2体。

ポケモンの中には600族と呼ばれる伝説のポケモンにも引けを取らない凄まじい力を持つポケモンがいる。サトシのポケモンにも進化すればそうなるポケモンはいても、今いるわけではない。

そんなサトシに1、2体倒せるかと言われたら良くて相打ちでダーククライともう1体というところだろう。

『だから、私達を使え』

「私達…?」

ミュウツーがそう言うのと茂みの奥からこちらに向かってくる足音が聞こえる。今まで完全に置いてけぼりを食らっていたヒカリは茂みから飛び出してきた赤髪の少女を避けると、その少女はサトシの方へとまっしぐらに向かっていく。

「カノン!？」

唐突にアルトマーレで出会った少女が現れたことに驚くサトシだったが、カノンと呼ばれた少女は頬を膨らますとその姿を変える。大地に立っていた足は縮まり、身体も人間から明らかに違うものへと変化する。黄色い目に白と赤の体躯へと変わったポケモンを目にしたサトシは再び驚いたように口を開けた。

「ラティアス!!」

本来の名前を呼ばれたラティアスは上機嫌になりサトシの頬に自分の頬を擦り寄せる。サトシはくすぐったそうに笑うと全くよく分からないヒカリは微笑ましいものを見るような目をしているタケシに尋ねる。

「えつと、あのポケモンは…」

「ああ、ラティアスだよ。昔、アルトマーレって街で出会ったんだ」

そう言いながらタケシは昔のことを思い出した。最近のようで何故か遠い昔のように感じる出来事。当時カスミという水ポケモン使いの少女と旅をしていたサトシとタケシはアルトマーレという街で行われる水上レースに出場するためにその街を訪れた。

そこで見事優勝したのはカスミで、本来ならあとは観光を少しして街を出るはずだった。だが、アルトマーレに伝わる伝説のポケモンラティオスとラティアス、さらには街に隠された秘宝『こころのしずく』を狙う怪盗団との戦いに巻き込まれる。

「そこで俺たちと一緒に街の危機を救ったのがあのラティアスなんだ」

「そうなんだ」

タケシの話を聞きながら未だにサトシとじゃれ合うラティアスの姿を複雑な気持ちで見るヒカリ。

『浮かない顔だな』

「別にそんなこと……って」

そう言い返したヒカリだったがタケシでもミュウツーでもない別の声に首をかしげ、隣を見る。そこには細いしなやかな四駆の脚を地面につけ自分を見下ろすポケモンがいた。

「あ、アルセウスッ!？」

「え！アルセウス!!」

ヒカリの驚愕にサトシは反応するとその名を呼ばれたポケモンは穏やかに微笑む。

『久しぶりだなサトシ、ピカチュウ』

「久しぶり！アルセウス！」

アルセウスとは幻のポケモンであり、伝説のポケモンとは位置づけが異なる。宇宙を創造したとされ、全てを超越したとされるポケモン。その強さはシンオウ地方に伝わる伝説のポケモンのディアルガ、パルキア、ギラティナが3体で挑んでも歯が立たない程である。そんなポケモンとサトシは友だちであり、此度の戦いに参加するべく彼もやってきたのだ。

『私以外にもお前を助けにポケモンが来ているぞ』

「え、ほんと!？」

アルセウスがちらりと道しかない場所を見やるとそこが黒く染る。そしてそこから這い出るように現れたのは金、黒、赤を差し色に灰色を主体としたドラゴンゾンビのようなポケモン。反転世界の主にして、彼もまたサトシと友だちになったポケモン。

「ギラティナまで来たのか…」

シンオウ地方の伝説のポケモンがまさか1人のトレーナーのためによってきたことに出会いの重大さに改めて感慨深い気持ちになるタケシ。反転世界からこちらの世界に来たギラティナはムカデのような体躯が変化し四足歩行になりその足を大地につける。そこにピカチュウが駆け寄ると、ギラティナはピカチュウを口でつまんで放り投げると自分の頭の上に乗せる。それにピカチュウは嬉しそうにはしゃぎ、それを見たフカマルもギラティナへと近づき放り投げられている。

さらにポッチャマもギラティナに放り投げてもらおうと彼に近づいたがその前に何者かに首を摘まれ空高く飛翔する。

「ポチャ~~~~!!？」

「ポツチャマ!？」

ポツチャマの持ち主であるヒカリはポツチャマを連れ去った空高く舞う白い翼を持ったポケモンを睨みつける。だが、サトシのみが目を輝かせ友の名を叫んだ。

「ルギア！」

オレンジ諸島の旅路で出会った幻のポケモン。その名をルギア。タケシはオレンジ諸島の旅に同行していなかったため初見であるが、サトシから出会ったことがあるという話を聞いていたためそこまで驚きはしていない。しかし、先程からシンオウ地方以外からやってきた名前も姿も初めて見るポケモン達にヒカリは「すっごーい…」と言葉を失っている。

ポツチャマもルギアがサトシとピカチュウの友だちと分かると彼の頭の上に乗って夜空を眺めている。

ミュウツー以外のポケモンが好意的だったこともあって、サトシのポケモンをはじめ、ヒカリとタケシのポケモンもギラティナやルギア、アルセウスらと言葉を交わし僅かな時間で友情を育んでいった。

「ルギア来てくれたんだ」

『私が幻であること。その方が世界のため……だが今回は君のために幻であることを捨てよう』

サトシとの再会を喜ぶルギアは以前よりも少し大人びてるようだが根は変わらないサトシに微笑みを浮かべる。サトシもここまで飛んでやって来てくれたルギアへと感謝の意を込めて手を差し出す。すると、ルギアは羽を先でサトシの手に触れ、握手をするように互いに手を握る。

それを静観して見ているミュウツーは眉を潜めながら自分の周りにサトシらのポケモンがいないことに何の違和感も、寂しさも感じなかった。けれども、いつの間にか隣にいたピカチュウに気づく。

『お前も久しぶりだな』

「ピカア、ピカチュー！」

『ああ、皆元気だとも』

ピカチュウは挨拶を交わしながらミュウツーと共にいたクローンポケモン達はどうかと尋ねた。それにミュウツーは微笑み混じりに答える。

『お前達も元気そうだな』

「ピカ！」

そうしてヒカリがポケッチを見れば夕食からかなり時間が経っていることに気づく。

「サトシ！もうこんな時間よ」

「うわほんとだ！」

駆け寄ってポケッチを見せるヒカリにサトシは言葉の割には慌てる様子はない。久しぶりに出会った友だちとの再会に喜んでいる間に経過した時間など彼にとっては些細なことなのだろう。

『時間が無いなら目的を手短に済ませよう』

ルギアがそう言うと、ミュウツーはコクリと頷く。サイコキネシスでサトシのバッグから空のモンスターボールを引っ張り出す。

『これで我々を一度捕獲するといい』

「え、ええっ!？」

幻のポケモンをモンスターボールに入れる。サトシはこれまで伝説や幻のポケモンに数多く遭遇したが、ゲットしようとしたことは無い。ゲットすればその地域の守り神や主がいなくなってしまうし、そもそもゲットできるのかという疑念もあるためそのような考えに至らなかった。だが、まさかポケモンの方から要請されるとは彼も予想外である。

『1日だけだ。ダークライを使う者との闘いが終われば我々は自分がいるべき所へと戻る』

そのラティアスは知らないが、とアルセウスは言葉を飲み込んだがサトシとラティアス以外のポケモン達からは「あいつはどうするんだろう」という視線が集まっていた。

「みんなの気持ちは嬉しい……けど悪いよ」

『何がだ』

「タクトさんは多分、ダークライとバトルして勝って実力でゲットしたんだ。なのに、俺だけ決勝戦に行きたいからってみんなの力を借りるのはずるいと思う」

ミュウツーの間にサトシは勝利と自分のポケモンで勝ちたいという思いの中で揺れ動く葛藤の中でそう答えた。

『だが私たちがお前に力を貸すのは何もお前のためだけではない』

「え？」

ルギアの言葉に思わず首を傾げるサトシに代わってアルセウスがテレパシーで話す。

『ここに来た私たちはお前に助けられた。だから、今度はお前を助けたいとここまで来たのだ』

つまりは自己満足であるとアルセウスは少し自嘲するように言う。

『それにタクトというトレーナー。あれだけの伝説のポケモンを所持しているのはどこか妙だ』

以前にポケモンコレクターと呼ばれる輩にサンダー、フリーザー、ファイヤーを囿に自分をコレクションに加えようとした人間が居ることを身をもって知っているルギアはタクトに対して懐疑的であった。それはミュウツーと同じで『ただの人間に奴らが簡単に捕えられとも思えない』と意見を出す。

「ギラティナとラティアスはどうなんだ？」

『ギラティナとラティアスは純粹に君への好意だ』

テレパシーの使えない2匹に代わりルギアが言葉を代弁するとギラティナはサトシを温かい目で見下ろし、ラティアスはカノンの姿のままサトシの腕にくっついていてる。

「分かった……タクトさんとのバトルだけみんなの力を借りるよ」

けれどとサトシ付け足すとピカチュウに瞳を向ける。

「6匹目はこいつだ。こいつなら相手がグラードンでもライコウとかでも絶対大丈夫だ」

サトシの期待にピカチュウはいつものように彼の肩に乗って「ピツカツ！」と勇ましく鳴いてみせるとミュウツーは首肯した。

『いいだろう』

ミュウツーの決定にアルセウスやギラティナ達も頷くと、彼らは目の前に置かれたモンスターボールに触れる。ポケモンをゲットするのは基本的に自分のポケモンで弱らせてからゲットするのがポケモン研究所やポケモンスクールでは当然とされている。しかしこのサトシという少年は、ポケモンに対して真摯に向き合い、傷ついていたら助け、仲間を欲していたら手を差し伸べる。そんな彼に惹かれてバトルを自らモンスターボールに入ったポケモンは珍しくない。

普通ならば弱らせたとしてもゲットが困難とされている伝説のポケモン達であるが、彼らはサトシに対して恩があり友情を感じている。さらに今回だけの約束も必ず守るものだろうと信じて躊躇いもなくモンスターボールへと入った。そしてモンスターが静かに3回揺れるとカチツと音が鳴る。ポケモンをゲット出来た合図のようなものである。

サトシは振り返ってジュカイン達を見る。勝ちたいという気持ちを優先させミュウツー達の力を借りるか、自分のポケモン達で全力で悔いなく戦うか。僅かに残った葛藤が顕れるように揺れる瞳で彼らを見つめているとジュカインは口角を上げてサムズアップする。それは「別に構わない」という彼なりの言葉であり、ほかのポケモンたちも笑顔でサトシの背中を押す。

「…………ありがとう、みんな」

こうしてシンオウリーグ準決勝の布陣が正式に決まったサトシは翌日のバトルに備えて布団へと入りぐっすりと休む。来るべきポケモンマスター達の道は近い……。

……T o b e c o n t i n u e d

開幕 準決勝！ ダークライ登場！

『ついにやってまいりました！シンオウリーグスズラン大会準決勝！！』

ミュウツー達との再会から一夜明け、ついに準決勝。シンジとのバトルで注目を集めたサトシへの声援は凄まじく、実況のハイテンションぶりと合わさって会場のボルテージは非常に高まっていた。

『本日、最初のカードはこちら！マサラタウン出身のサトシ選手！昨日のシンジ選手とのお互いの全てを出し尽くすようなバトルに心を熱くしました！』

カントー地方から旅を始めてここまでやってきたサトシは準決勝という舞台に心を踊らせていた。それは自分のために伝説のポケモン達が駆けつけてくれたという嬉しさもあるだろう。

観客席ではヒカリにタケシ、売子をしてしているロケット団の面々の上の方ではシンジや現在リーグチャンピオンのシロナがサトシを見つめている。さらにテレビ越しでマサラタウンにいるサトシの母であるハナコやオーキド博士と共に旅をしたことのあるケンジ、ハウエン地方ではコンテスト会場の控え室に設置されたテレビからハルカが彼の活躍を願っている。マサトや彼のライバルであったシゲルも自宅からテレビの画面に張り付いている。

そして、実況者はサトシの向かい側長い髪とマントのような装束を風で揺らしながら不敵に微笑むタクトを見た。

『タクト選手はこれまでの試合をダークライ一匹で全て撃破。今大会のダークホースとしてここまで勝ち上がってきました。今回もダークライのみで完封できるのか!?』

伝説のポケモン ダークライを使うタクトに観客たちの一部は彼

に対してエールを送る。その異質で圧倒的な実力はまさに優勝候補の一角であり、たとえシンジがサトシに勝って準決勝に上がってきても彼の勝利は揺るがなかっただろう。

だがそれもサトシの手持ちが何の変化もなければだ。

審判がバトルフィールドの外枠に立ち旗をあげる。1体目のポケモンを出せという合図である。準決勝も6対6のフルバトル。同じポケモンを2匹以上使用してはいけないという以外の制限はないため、タクトはこれまで通りダークライを繰り出す。

影が揺れるように蠢く紅白を差し色とした黒を基調としたシンオウに伝わる悪夢を見せるポケモンの姿にふさわしいその不気味さの中に秘められた強さに観客は熱狂する。

「くぜ」

サトシは帽子のつばに触れ気合いを込める。マサラタウンから旅立った頃はポケモンを捕まえるときは帽子を回したりしてたなど悠久に浸り、彼はモンスターボールを握る。

「行けっ、ミュウツー!!」

ポン!と音が響くとモンスターボールの中から姿を現したのはミュウというポケモンの遺伝子から作られた人造のポケモン。かつて、自分は誰だ。誰が生んでくれと頼んだという答えのない自己問答の果てに人々に復讐するという道を選んだミュウツーであったが、今は自分を救ってくれた1人の人間のためにその力を振るうべくバトルフィールドに立つ。

『こ、これはーき、サトシ選手 ミユウツーを出した!!?』

これには観客や審査員、実況者も驚きの声を上げる。タクトも

「へえ」と興味深そうに目を細める。

「ミュウツー!? ちょっとこれどういうことよ!？」

サトシの戦いを見守るカントー地方やオレンジ諸島、ジョウト地方を旅した仲間、ハナダシティのジムリーダー カスミ。突如サトシのモンスターボールから現れたミュウツーの姿に彼女も驚きを隠せず姿にテレビに迫る。サトシには自転車を壊され弁償してもらうために彼の旅に同行する中でカスミもミュウツーと出会った。その強さを目の当たりにしたことのあるカスミはあのミュウツーがサトシの手持ちになっていることに驚愕し、テレビを揺らす。そんな彼女の様子をミュウツーを知らない姉達は「あらあら」と微笑ましそうに見つめる。

「こらサトシ説明しなさいよ! いつのまにゲットしたのよ!」

聞こえるはずもないテレビの向こうにいるサトシへと怒鳴るように質問を投げかけるカスミだが、遠く離れたサトシには感知できるはずもなくミュウツーに何か語りかける。

「君も伝説のポケモンを持っていたんだね驚いたな」

それに割り込むようにタクトは純粋な感想を述べた。まさか自分以外にも伝説のポケモンを持っているトレーナーがいるとは思わなかったし、なにより初めての経験で彼は少しばかり高揚していた。サトシもかつての敵とこうして共に戦えるのが嬉しいのか口角を上げる。

審判がもう片方の旗をあげる。これが振り下ろされると同時にバトル開始の合図が成される。

そして「バトル、開始!」の一声と共にシンオウリーグスズラン大

会準決勝が開始された。

###

先に動いたのはタクトのダークライであった。

「ダークライ、ダークホール！」

腕の中に黒い渦のようなモノを形成したダークライはそれをミュウツーへと投げ放つ。触れれば悪夢へと誘うダークライ専用の技であり、眠りに陥った者に悪夢を見せる特性ナイトメアを持つダークライの必殺技である。

不眠や寝言を持たないポケモンなら躲すことも防ぐこともできない技だが、ミュウツーは違う。

「ミュウツー！しんぴのまもり！」

すると、サトシ側のバトルフィールドに薄く透明のベールのような膜が張られダークホールがかき消されていく。あらゆる状態異常を無効化するしんぴのまもりはダークライ対策にうってつけであり、先ほどサトシはミュウツーに使えないかと確認をとったのだ。

『おーっと、サトシ選手のミュウツー！ダークライのダークホールを無効化しました！』

これまでのバトルでダークホールからの夢喰いの戦法で敵の体力を奪い、あくのはどうなどでトドメを刺してきたダークライの十八番が封じることになったサトシはガッツポーズをとる。しかしタクトとダークライの余裕のある表情は変わらず、次の行動へと移る。

「相性ではこちらの方が有利だ。ダークライ！あくのはどう！」

「躲せミュウツー!」

エスパータイプであるミュウツーは悪タイプのダークライと相性が悪く、さらにはタイプ一致であるあくのはどうの直撃は避けなければならぬ。だからこそサトシは回避するように指示したのだが。

『そんなことしなくてもいい』

ミュウツーはその選択を無視すると腕にエネルギーを収束させる。それはエスパータイプの持つ独特なエスパーエネルギーではない。サトシはその独特なエネルギーに覚えがあった。

「波導……? そうか! ミュウツー、はどうだん!」

そのエネルギーの正体に気づいたサトシはミュウツーがあつた技を使えると指示を変更する。ミュウツーにあくのはどうが迫る。その刹那、彼の手から離れた生命エネルギーを集約させた一撃はあくのはどうを跳ね除け、今度はダークライへと迫る。

「ダークライ、かげぶんしん」

姿が一つ、二つ、三つ…それ以上に増えていく。どれが実体か区別をつけるのが難しくなるほどに数が増えていく。しかし、ミュウツーの放ったはどうだんは軌道を変えダークライの実体へと着弾した。

「よっー!」

「なにっ!?!」

サトシは拳を握り、タクトは眉間にシワを寄せる。あくのはどうを

突っ切ってきたため、はどうだんの威力は幾分か下がっておりダークライへのダメージは多くはない。しかし、悪タイプに対して格闘タイプのはどうだんは効果ばつぐんである。なので、ダメージは結局少なくもない。

タクトはしばし逡巡したのち、ダークライを戻した。

『おーっとー……ここでタクト選手ダークライを下げました!』

今までダークライ1匹で試合を勝ち進んでいたタクトがそのダークライを下げた。それに実況も観客も今日何度目か分からない驚きを見せた。そして、タクトの2匹目のポケモンを目にしてさらに驚くこととなる。

「ゆけっ、ラティオス!」

次に現れたのは青と白を基調としたデザインで、戦闘機のようなシルエットをもつポケモン。その名もラティオス。ラティオスと共に水の都アルトマーレという街で守り神をしている。その姿はサトシとタケシ、そしてハナダジムのテレビに八つ当たりしているカスミも知っているため彼らの反応は薄い。しかもサトシとタケシに関しては昨日にラティオスを見ているためかなり希薄であった。

「じゃあ、こっちも」

ミュウツーを戻したサトシはタクトのラティオスに倣ってラティオスを繰り出した。ラティオスと同じく戦闘機を思わせるシルエツトだが、ラティオスよりも体躯は小さく白と赤を基調しているためどこか可愛らしい印象を受ける。

「こら、ラティオス!今はいいから!」

さらには守り神と呼ばれるポケモンが一般のトレーナーにじゃれついている。見方によっては人とポケモンを超えた仲に見える。恋人や人生のパートナーのいる人間はサトシとラティアスの様子を微笑ましく見守っている。しかし、観客やテレビの前で中継を観ているパートナーのいない人に関しては何か憎悪のようなものを滾らせている。シンオウ地方から遠く離れたカロス地方では1人の少女が複雑な目を向けているがそれはサトシの知らぬ話だ。

「いくぞラティアス。お前の兄ちゃんに良いところ見せてやるんだ」

サトシがそういうとラティアスはタクトのラティオスを見つめる。ラティオスとラティアスは兄妹関係にあるが、この2匹は別々の生まれでありそのようなことはない。ラティオスはこれはバトルであり、トレーナーという人間に育てられたため闘争心を剥き出しにしている。一方、ラティアスはアルトマーレで兄に守られていたため戦闘能力はあまりない。それでも好きな人を助けたいと思っただからやって来たのだ。ラティアスはサトシから離れ、バトルフィールドに向かう。

『な、なんということでしょう！これまた伝説のポケモン同士の立ち会い！ポケモン研究者達が狂乱していることでしょう!!』

ますますヒートアップする実況者。そして、サトシとタクトは自分のポケモンにそれぞれ指示を下す。

「ラティオス、りゅうのはどうー！」

「ラティアス、ひかりのかべ！」

攻撃的な技に対して守りを選択するサトシ。普段は攻めて攻めまくるサトシのバトルスタイルを知る人間からすれば違和感を覚える

だろう。それは昨日、サトシとバトルしたシンジも同じ。さらに彼の場合はミュウツーやラティオスを使われなかったことから手を抜かれたと思ひ込み表情には苛立ちが浮かんでいる。

サトシがしんぴのままひかりのかべを使用したのはダークホール対策でタケシから考案されたものであり、ミュウツーが使えると言ったから使ったまでである。ひかりのかべに関してはラティオスが攻撃的な技をあまり所持していないため隙を窺って技を決めようとしているからであり、いつものガンガン攻めるを無くしたわけではない。

彼らに協力してもらっているからこそ、彼らの持ち味を最大限に活かして戦いたいというのがサトシの願いであった。

ひかりのかべにより、りゅうのはどうの威力を軽減させる。特殊技主体のタクトのラティオスにとってこれは痛いところだが、それでもダメージが通らないわけじゃない。軽減させたとはいえ、ラティオスは僅かにダメージを受けている。ならばとラティオスに次の命令を下す。

「ラティオス、もう一度 りゅうのはどう！」

「躲せ！」

ひかりのかべを貼ったとはいえ、こうかばつぐんの技を受けてしまうとラティオスにも負荷がかかる。幸い、ラティオスはスピード重視でりゅうのはどうを躲すのは容易であった。

「りゅうのはどう！」

だが、タクトは手を緩めることなくラティオスに何度もりゅうのはどうを撃たせる。それを何度も躲すラティオス。躲せなかったものは守るで防いでいる。

サトシはラティオスを疲弊させる作戦かと訝しんだが、タクトの狙

いはそうではなかった。時間が経過し、バトルフィールドを覆っていた薄い膜が消えている。それを目視したタクトは薄く微笑むと手を伸ばした。

「ラティオス、れいとうビーム！」

タクトの狙いはラティアスの動きを封じること。見るにあのラティアスに特別な攻撃力はない。技も見せた中ではひかりのかべと守るくらいで耐久型。これではジリ貧になると悟ったタクトはラティアスの動きを止めて一気に決める作戦に出たのだ。

ラティオスから放たれたれいとうビームは避けきれず、守るの体制に入れなかったラティアスの羽根に命中する。そして、しんぴのまもりの効果が消えた今、ラティアスの羽根は氷状態となる。

「ラティアス！」

「さあ、ここからだ！」

タクトの攻めの姿勢に劣勢に追い込まれたサトシとラティアス。タクトとラティオスのコンビネーションにサトシは勝つことができ
るのか――

To be continued

激突！ ラテイオスとラテイアス！

「なんだよなんだよ！」

「どうしたのよ急に」

シンオウリーグスズラン大会準決勝をヒカリとタケシの隣で見ているジュンは苛立ちを顕にした。それは自分がライバルと思っていたトレーナーの戦い方への不満か、それとも自分に隠して伝説のポケモンを所有していたことか。唐突に声を荒げたジュンにヒカリは尋ねる。

「サトシのバトルスタイルは攻撃に次ぐ攻撃！攻撃は最大の防御だ！って感じだろ！なのになんだよ、今日のバトルは！」

ジュンの怒りと疑問は少し離れたところで見ているシンジやテレビ越しに観戦しているサトシの今までのライバル達も感じていることであった。サトシの手持ちに加わっていた伝説のポケモン達は過去のリザードンのようにいうことを聞かないということではなく、サトシの命令通りに動いている。それなのにラテイアスに対しては一切攻撃の指示を出していないのがジュンには不満であった。

「多分あのラテイアスはラテイオスに有効な攻撃手段、いや、有効どころかまともな攻撃技も持ってないんじゃないか」

思い返してみればアルトマーレの街であるラテイアスがポケモンに対して攻撃しているのを見たことがないし、基本的には逃げ隠れしてばかりだったとタケシは2人に伝える。

「じゃあなんでそんなポケモンをバトルに出すんだよ」

「わからない…けど、サトシのことだ何かあるんだろう」

タケシは腕を組みながらサトシを見守る。ジユンも自分が騒いだところでサトシの真意は分からないし、周りからの奇異な目モノを見る目に当てられ大人しくなる。

そして、ジユンがバトルへと目を向けた時サトシのラティオスの羽が凍り付いていた。

「さあ、ここからだ！」

しんぴのまもりの効果が切れるのを待ち、ラティオスの動きを封じたタクトはここぞばかりにラティオスへ攻撃の指示を出す。

「りゅうのはどう！」

ラティオスに強力なエネルギーが収束する。羽が凍って思うように動けないラティオスは背後にいるサトシを見た。その目は「助けて」と懇願するように潤んでおり、サトシは額に汗を浮かべたまま動かない。

「ゆけっ！」

タクトの合図で最大までチャージされたりゅうのはどうがラティオスへと襲い掛かろうとする。そして、ついにサトシが口を開いた。

「ラティオス、浮くのをやめて地面にぶつかるんだ！」

りゅうのはどうがもう少しで当たるという寸前でラティオスは脱力する。すると、凍った右羽から落ち、氷に亀裂が入る。それでもラティオスの機動力は戻らず、タクトは一瞬サトシとラティオスの行動に驚くもすぐにラティオスへと命令を下す。再び放たれたりゅうの

はどうは一直線にラティアスへと向かう。

「ラティアス、みずのはどう!」

ここで初めてサトシはラティアスに攻撃の指示を出す。そしてみずのはどうはりゆうのはどうへとぶつかるが、やはりりゆうのはどうの方が威力が高く威力を落としたただけであった。しかし、サトシの狙いはこれだった。

「今だ!右羽根で受け止める!」

その命令は誰もが耳を疑うモノであった。カビゴンやドサイドンなどの重量系ポケモンであればその指示も分からなくはない。だが、ラティアスは細身で防御力は高くはない。それを受け止める力はラティアスにはない。でも、サトシはそうさせた。その理由に気づいたのは会場内ではごくわずかであり、りゆうのはどうがラティアスへと着弾する。

大きく狼煙が上がり、土煙にラティアスが隠れる。すぐさまその土煙が晴れてると羽の氷が落ちて空を舞うラティアスが現れる。

『す、すごい!サトシ選手!りゆうのはどうの威力を落としてラティアスの氷を破壊しました!』

ラティアスに自力で破壊することができないのなら相手の技を使えばいい。時にフィールドや相手のトレーナーの思考すら利用するサトシならではの機転であり、さらにラティアスがサトシを信じなければできないことであった。

「よくやったぞラティアス……って違う!あっちだ!あっち!」

サトシはラティアスの頑張りを褒めるも、それを嬉しく感じたラ

ティアスがサトシとじやれつく。その姿を見ていつもポケモンを出せば抱きつかれ噛み付かれといった経験のある青い髪をした売店が「親近感あるなあ」と呟く。

「仲がいいってレベル超えてない…?」

「まあ…サトシはポケモンと仲良くなる天才だからな」

ヒカリの疑問に仲良しどころかキスマでしたくらいだと言いつつになったタケシはその言葉を飲み込む。タケシは思う。自分で言うておいてかなり当たっているなど。普通ならば神と呼ばれるポケモンや幻のポケモンらが1人のトレーナーにここまで協力的になるなんて仲良くどころかそれ以上になる才能でもなければ無理だろう。それはポケモンでなくても同じこと。こうしてカントーからここまですぐに旅している自分もサトシの人柄に惹かれたのだろう。人知れず頬を緩めたタケシはサトシに心の中で再びエールを送る。

がんばれ。負けるな。

###

氷を敵の攻撃を利用して破壊したサトシとラティアスだが、危機から脱したとはいえまだ劣勢なのは変わらない。ラティアスの攻撃技はみずのはどうとスピードスター、そしてラティアスしか覚えることのできないミストボールの3つで、それ以外は自己強化や防御技と生存率に特化した構成になっている。

残念ながらラティアスにラティオスを短期決戦で倒すだけの能力はない。そのためサトシは少しずついいからラティオスにダメージを与えていくプランであった。しかし、ラティオスとラティアスの能力には雲泥の差があり、唯一のスピードで優っているもののそれも先ほどのように氷漬けにされて動きを封じられてしまえばこちらが

圧倒的に不利になる。

野生とトレーナーによって育てられたポケモンの力の差をヒシヒシと感じ、サトシは改めてタクトというトレーナーの印象を変える。

「こっからだラティアス！スピードスター！」

「ラティオス、れいとうビーム！」

サトシは一点攻勢に転じ、タクトはラティアスの動きを止めるべく指示を下す。ラティアスの方がわずかに技を繰り出すのが早かったが、ラティオスのれいとうビームの威力は高く空中で凍り付いた星達は浮力を失うと地面へと落ちてその形を崩していく。

「ラティオス、逃げられないよう接近してれいとうビーム！」

遠くにいれば躲されるか、技で相殺されるならそれができない距離まで近づく。タクトの命令通りラティオスは猛進するようにラティアスへと迫る。だが、スピードが上のラティアスは追いつかれないように、スピードスターを放ちながらフィールドを駆け回る。だがどれも星屑のように散っていき、疲労が溜まり時間のみが過ぎていく。ラティオスの方はまだまだ動けそうであるが、ラティアスはやはり限界が刻々と近づいていた。

「ラティオス！」

タクトはこれ以上長引いてラティオスを余計に疲弊させるよりは一気に決めてしまった方がいいと判断し、ラティオスの動きを一旦止める。

「りゅうせいぐん！」

ドラゴンタイプの大技 りゆうせいぐん。

サトシのフカマルも使うことができる技であるが小型ポケモンと伝説のポケモンが放つモノは威力も範囲も桁違いであり、ラティアスのスピードを持ってしても全てを避けることは叶わず一撃でも当たれば戦闘不能になるだろう。しかし、りゆうのはどうやれいとうビームと違ってりゆうせいぐんは空へと放つ、それが地面へと降り注ぐ。つまり、攻撃に移行する一瞬はラティオスは隙だらけなのだ。サトシは口角を上げると「今だ！」と声を上げた。

「ラティアス、ミストボール！」

霧状の羽毛で包み込むようにしてエネルギーが形成され球状となり、空を見上げりゆうせいぐんを放とうとするラティオスへと着弾する。しかし、ラティオスを仕留めるにはやはり足りず、空中で爆発が起き隕石が降り注ぐ。それをラティアスは掻い潜るように避ける。当たりそうなものは守るを使い防ぐ。

「いいぞラティアス！」

だが、まもるのベールが抜けた瞬間、ラティオスにりゆうのはどうを指示していたタクト。りゆうせいぐんはあくまで陽動で本命は正面からの効果的な一撃。反動で特攻が下がったとはいえ、防御姿勢でなかったラティアスにとっては効果抜群で地面に倒れる。

「ラティアス！」

サトシがその名を呼ぶと、ラティアスは力を振り絞って立ち上がるうとする。しかし、スタミナも体力もほとんど残っていないラティアスに出来ることはなかった。

「ラティオス、トドメです」

これはバトル。非情にタクトはラティオスにラティアスを戦闘不能にするように指示するが、ラティオスはその指示に首を振った。

「なに?。」

顔を顰めたタクトに背を向け、ラティオスはラティアスを見る。このラティアスとは血は繋がらないものの、思うところはある。それにラティアスも自分の兄と同じ姿をしているモノに倒されるというのは複雑なものだろう。ラティアスはタクトのラティオスの温情を受け取り、サトシに視線を送る。

「……わかった。ありがとなラティアス」

そう言ってサトシはラティアスをモンスターボールに戻す。ラティオスの優しさでラティアスの頑張りには会場からは惜しめない拍手が送られる。

2人の手持ちポケモンの状況を表す電光掲示板にはラティアスは戦闘不能とはなっていないが、誰の目にも再び戦闘を行うには無理があると想像に容易かった。

そして、観客の興味はサトシへと戻る。次は一体どんなポケモンを出すのかと。そのサトシはラティアスのモンスターボールを撫でると違うモンスターボールを取り出す。

「頼んだぜ」

静かにモンスターボールを投げたサトシに対して、中から出てきたポケモンは怪獣のような鳴き声を出し会場に木霊させる。

金色の鎧、ほの暗い灰色の身体に赤と黒の目をした紅いトゲの生えた黒羽をはためかせてギラティナは現実世界へと降り立つ。その姿は見る者に畏怖を与え、実況もしばし言葉を失う。

『……な、なんでしようか！このポケモンは!? 私も見ることがありません！……今入った情報によるとこのポケモンはギラティナ！我々の世界の内側、反転世界に君臨するポケモンだそうです!!』

スタッフから渡されたポケモン情報を読みながら興奮を隠せない実況者。加えて観客からも自分たちとは違う世界に存在するポケモンを見れたからという喜びで歓声上がる。

一方で各地方のポケモン研究者はこの出来事に目を飛び出し、オーキド博士すらも顎が外れそうなくらいに口を開けている。

「反撃開始だ。いくぞギラティナ！」

まだまだバトルは始まったばかり。ギラティナの実力はいかに。果たしてサトシはタクトに勝つことができるのか。

……To be continued

スズラン大会準決勝 ギラティナの戦い！

ギラティナ。

シンオウ地方に伝わるポケモンながら、シンオウ地方の人々でさえその名を知る者は少ない伝説のポケモン。昔は乱暴者として知られていたが、その気性の荒さを見かねた創造主が裏世界へと追いやったという文献が残っているが、真実は定かではない。

しかし、その存在は今、全てのポケモンファンへと知られることになった。ドラゴンゾンビのような禍々しい黒い羽根と灰色のムカデのような体躯に、紅い眼が目の前の敵を見据えている。

睨まれているラティオスもまたギラティナの中に秘められた力を感知したのか、敵意を剥き出しにし身構える。ギラティナから発せられるプレッシャーは会場の人間どころかテレビ越しに見ている人々にも伝わっており、タクトも一筋縄では倒せないことを悟る。

「驚きだな。僕もかなりの伝説のポケモンと会ってきたがこんなポケモンは初めて見た」

素直な賞賛を送ったタクトはけれど勝つのは自分だと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべる。サトシはその勝負師の目に魂が揺さぶられる。頼もしい仲間と共にバトルで着てるだけでも嬉しいのに、戦っているトレーナーの強さに高揚感が高まり鼻の下を擦る。

「ラティオス！りゅうのはどうだ！」

先に動いたのはタクトで、ラティオスは先程のバトルの疲れを感じさせない動きでギラティナの視界から外れる位置に移動し、りゅうのはどうを放つ。しかし、サトシとギラティナは避けることも守ることもせずその攻撃を受け止める。

「なに?」

それに1番驚いたのはタクトであり、会場の人間達も同様であった。ドラゴンタイプを持つギラティナにとって、りゅうのはどうは効果抜群である。ギラティナのタイプを知っているのは彼と面識のあるサトシやヒカリ、タケシとその他研究者のみだが、伝説のポケモンの一撃となれば誰もが想像も絶する威力だと思っだろう。だが、りゅうのはどうをまともに受けたにも関わらず、ギラティナは主と同じく目を見開いているラティオスを見上げる。

「これでさっきの借りは返したぜラティオス！」

ラティオスのトドメを見逃してくれた礼として、わざわざ効果抜群であるりゅうのはどうを受けたと知ったタクトは絶句する。いくら温情をかけられたとはいえ、これは真剣勝負。普通なら技を躲して反撃にいくのがセオリーのはず。なのにそれをしなかったサトシとギラティナに対して疑問符のみが残る。

「ギラティナもありがとな。大丈夫か？」

モンスターボールからことの経緯を見ていたギラティナはサトシが自分に一切命令を出さなかったことからこうすることは予見できていたため咎めることも怒ることも無く、まだまだ平気であるのを伝えるべく咆哮する。

「よしっ！じゃあこっからは全力だ！」

再び咆哮し、その存在感と実力を見せつけたギラティナは僅かに身を引いたラティオスを見逃さない。直感的にラティオスよりギラティナの方が力が上のかを感じ取ったタクトはこちらも本気を出さざるを得ないと拳を握る。

「ラティオス！りゆうせいぐんだ！」

ラティアスへりゆうのはどうを確実に当てるための陽動に使った技を、今度はギラティナを確実に倒すために使用する。しかし、何故かその攻撃の先にギラティナはおらず、当たることなく地面に直撃し大きなクレーターをいくつも作るだけとなる。

『おーっ！とー！ギラティナが姿を消している!? 一体どこに行つたというのでしょうか!』

驚く観客とタクトとラティオスにサトシは意趣返しと言わんばかりに不敵に笑ってみせると大きく腕を上げた。

「ギラティナ！シャドーダイブ！」

すると、ラティオスの真下からギラティナが飛び出しその巨躯な身体をぶつける。

「続けてシャドークロー！」

さらに畳み掛けるようにサトシは攻撃の指示を出す。まさに今大会で見せてきた攻めに次ぐ攻めの姿勢であり、ギラティナはそれに応えて羽にある紅いトゲを硬化させラティオスを切り付ける。ギラティナとかなり近距離にいたラティオスはシャドーダイブのダメージもあつて避けることが出来ず、どちらもまともに受けてしまう。エスパークタイプのラティオスにとってはゴーストタイプの攻撃を2回連続で喰らえば一溜りもなく、バトルフィールドの上に倒れる。

「ラティオス戦闘不能！」

審判からその言葉が出ると共に、観客からはどつと歓声上がる。

ついに無敗を誇っていたタクトのポケモンが1体倒されたのだ。しかもそれは僅差の戦いではなく一方的な蹂躪のようであつという間であった。

「ゆけつ、ダークライ！」

しかし、タクトはこの程度では怯えないし挫けない。しんぴのままりが消えた今、ダークホールは有効であり、眠りに落ちればナイトメアとあくのはどうのコンボでギラティナを倒すのは容易である。だが、そう簡単に悪夢に落ち倒れるのであれば彼は伝説のポケモンとして名を刻んでなどいない。

「ダークホール！」

「ギラティナ！シャドーダイブ！」

またしても攻撃を躲し、姿を消したギラティナ。タクトは注意深く観察し、ギラティナが出現しそうな場所を探す。ダークライもいつ出てきてもいいようにダークホールを放てるようにしている。

だが、それでもギラティナの方が1歩上でありまたしても真下から現れ、その身をダークライに叩きつける。あくタイプのダークライにシャドーダイブは効果はいまひとつであるがギラティナの巨体さから繰り出される一撃はタイプの相性を感じさせない。

続けてシャドークローのコンボを繰り出そうしたギラティナに、タクトは今だとダークライに力強く指示をだす。

「ダークホール！」

シャドーダイブの際にかなり近づいていたギラティナにダークホールを当てるのは難しくなく、真正面から浴びせる。攻撃の体勢から眠りに誘われ一転して脱力していくギラティナは自然と重くなる

瞼を閉じる。

『ここで炸裂！ダークライのダークホールだあー!!これは流石のギラティナも眠ってしまったあ!!!』

「ギラティナ!!」

ぐうぐうと眠りに入ってしまったギラティナにサトシは彼の名を呼ぶが、ダークライの特性ナイトメアによって悪夢を見せられている彼は苦しそうな唸り声を上げる。

「ダークライ!あくのはどう!」

好機を逃さずタクトはプラン通りの攻撃を実行させ、眠って隙だらけのギラティナの身体に着弾する。

「ギラティナ!」

「ダークライ、ゆめくい!」

効果抜群の一撃をくらっても目を覚まさないギラティナにタクトはダークライの体力を回復しようと回復技であるゆめくいをつかう。これは眠っている相手にのみ有効な技で、ダークホールにナイトメアを持つダークライとは好相性な技である。ミュウツーのはどうだんやギラティナのシャドーダイブを受けてかなりダメージを受けていたダークライもかなり持ち直す。

ギラティナを眠らせ、ゆめくい体力を回復し、あとはトドメをさすというところでギラティナが突然怒りを孕ませた咆哮をあげる。

「なんだ!?!」

「ギラティナ!?」

ゆめくいはその時見ていた夢を養分として食べてしまう。そして、夢を食べられたモノは自動的に次の夢に移行するのだが、ダークライの特性によりそれは強制的に悪夢となる。だが、それが災いしギラティナにとっての悪夢に選ばれてしまったのはディアルガとパルキアがアラモスタウンで争ってしまった時のことであった。ギラティナの夢を見ることの出来ないサトシやタクトにはいきなりギラティナが叫んだようにしか見えないが、ポケモンであり人の言葉が話せるという変わったニヤースのみがギラティナの咆哮に秘められたその事情を理解した。

『な、なんと、ギラティナ！眠りながらも身体を起こしました！』

そして、その悪夢はギラティナに恐怖ではなく怒りを与えてしまい、眠りながらもその身体を無理やり機能させることとなる。予想外の事態に狼狽えたタクトだったが、すぐに持ち直しダークライに早くトドメをさすように指示をだす。

「ギラティナ！右に避けるんだ！」

ダークライの放ったあくのはどうはギラティナに当たることはなかった。しかし、今度はどこかに消えてということはなく、サトシの指示通り右に避けていたのだ。

「なに?」

悪夢に苛まれながらも自意識を保つギラティナは薄れる意識の中でサトシの声を聞きわける。それにサトシは手をにぎるとギラティナにもつとこの声を届けようと腹から声を出した。

「よし！近づいてドラゴンクロード！」

「避けるダークライ！」

ギラティナの中ではダークライはディアルガとパルキアであり、サトシの指示がなくても攻撃することには変わりはない。しかし、彼がいなければ精細さをかいてあくタイプに効果いまひとつのゴーストタイプの技を使っていただろう。

細身でスピードの優るダークライはギラティナから距離を取る。そして、タクトの指示を待った。この敵は己の力だけではむりだと。悪夢を怒りに変えて自分に向かってきた敵など今までに1度もおらず、ダークライは自分の身が震えているのを感じている。しかし、彼にはタクトがいる。これまで共に戦ってきた絶対的信頼を寄せられるタクトが。

「ダークライ、そいつには直接攻撃しかない。距離を保ちつつ、あくのはどうだ！」

「左に避ける！」

主人の命令通り距離を取ってあくのはどうを放つダークライ。しかし、またしてもそれは躲されてしまい、視線が合わぬというのにギラティナからはダークライへ向けての敵意が誰の目から見ても明白に現れている。

「ねえ、なんでギラティナはあんなにダークライを敵視してるわけ？てか、なんで動けてるのよ」

「どうやらギラティナは夢の中で昔に自分を怒らせたポケモンに怒りを燃やしてるみたいじゃ」

「てことは、ダークライをそのポケモンと勘違いして怒ってるってことか？」

赤い髪の売り子が売り子にしては耳も髭も尻尾もある謎の売り子にそう尋ね、その答えに先程サトシに親近感を覚えていた青い髪の売り子が確認するように口を開く。猫のような売り子はそれに頷き、見ればダークライは逃げ惑うようにギラティナの攻撃を避けてはあくのはどうを放っているが、サトシの正確な指示により不発に終わっている。

だが着実にナイトメアの付随効果でギラティナの体力は減っており、さらにタクトは怒りの原因となっている夢を消そうとゆめくいを指示する。

「させるか！ギラティナ、シャドーダイブ！」

しかし、その前に姿を消したギラティナにゆめくいは当たらない。体力を回復したといえど、怒りに燃えるギラティナの攻撃を受けてしまえばダークライもどうなるか分からない。これまでのシャドーダイブで真下から現れているギラティナにダークライは自分の真下にあくのはどうを撃つ用意をする。タクトもそれを了承し、ギラティナが現れるのを待ったが一向に現れる気配はない。

「今だー！りゅうのはどうー！」

ダークライとタクトが真下へと気を取られたその刹那、ギラティナはサトシの影から現れると大空へ舞い、感覚を研ぎ澄まして眠りながらもフィールド上にいるダークライへと強烈な一撃を放つ。咄嗟に反応したダークライはあくのはどうを放つも、二つの攻撃はお互いにつつかることなくすれ違い、避けることも出来ずに2体の身体へと着弾する。

ダークライは音もなく地面に身を倒し、ギラティナは呻き声をあげ

ながらサトシやピカチュウを踏まないような場所で前のめりに身体を伏した。

「ダークライ、ギラティナ共に戦闘不能！」

これまで蓄積されたダメージが仇となったダークライと、ナイトメアとあくのはどうで溜まったダメージによりギラティナはダウンする。それを咎める者などいるはずもなく、二匹の健闘ぶりに歓声がかかる。サトシとタクトは頑張ってくれたポケモンに「お疲れ様」とひと声かけながらモンスターボールで休ませる。

これで倒れたポケモンはサトシのラティアスがバトルフィールドに立つても何も出来ないことを考慮すれば2匹ずつ。お互いに残り4匹で、次のポケモンを選出する。

「ゆけ、レジギガス！」

「ミュウツー！君に決めた！」

タクトが出したのは先程のギラティナが小さく見えるほどの4メートル近い身長を持った巨人。長く太い腕、短い脚、胴と一体化した頭部など、いびつながらも力強さを感じさせる造形。全身は白と黄色を基調としており、腕や脚、腰回りに文字と思しき黒い帯のような模様が見える。ホウエン地方に伝わるレジスチル、レジアイス、レジロックと同じように点字のような点でできた目を持った異質さを感じさせるポケモンであった。

対するサトシはダークライとの戦いで少しだけ姿を見せた無傷のミュウツーで、腕を組みながらレジギガスを見上げている。

果たしてこの2匹はどんなバトルを繰り広げるのか。シンオウリーグスズラン大会準決勝は続く。続くつたら続く。

……To be continued

脅威のポケモン レジギガス！

予想以上の激戦を繰り広げるシンオウリーグ準決勝を、現シンオウチャンピオンであるシロナは昂る気持ちを抑えて傍観するように見守っていた。観客や審査員が大歓声を上げる中、彼女は静観を守り、チャンピオンの威厳を保っていた。しかし、その心中はとても穏やかではない。

ダークライにミュウツー、それにラティオス、ラティアスには驚きはしたが、タクトが伝説のポケモンを使っているのは度々噂に聞いていたので目を見開くほどではなかった。サトシに関しても、元々かたやぶりな少年であったしシンオウ以外にもカントー、オレンジ諸島、ジョウト、ホウエンと旅をしていたという話を耳にしていたシロナは「まあ彼なら伝説のポケモンの1匹や2匹と仲睦まじくてもおかしくはないか」と無理やり納得した。

だが、それもギラティナを見た瞬間に瓦解した。シンオウには自分の方が長く在住しているし、トレーナー以外に考古学者という側面を持つシロナでもギラティナは見たことも会ったこともなかった。それがまさかのサトシのモンスターボールから飛び出したのである。その時のシロナの顔は驚きに満ちており、ガブリアスがモンスターボールから出て来てくれなければバトル中のサトシに詰め寄っているところであった。

そのギラティナもダークライと相打ちになり、サトシの手元へと返っていく。誰が今年のチャンピオンになるかを現チャンピオンとして見に来たシロナであったが、今ではその目的を失い、バトル後にサトシに話を詳しく聞くことしか考えていない。シンオウ地方に伝わる伝説のポケモン、ギラティナ。その謎は大きく包まれており、サトシを介してその謎を解き明かそうと彼女は目をギラつかせる。そのついでにバトルを観戦しようと思えば彼女はフィールドに目を向けた。

——しかし、彼女は知らない。サトシの手持ちには彼女が調査している伝説のポケモンの創造主がいることを。それを知るのは

まだ少し先の話である。

###

ダークライとギラティナが倒れ、次に現れたのはレジギガスとミュウツー。片や本日初めて姿を現した巨大なポケモンで、片や本日2度目の登場ながら無傷でその風貌からはレジギガスとの身長差を感じさせない余裕がある。

「でけえ…」

サトシはレジギガスを見上げながら小さくつぶやく。シエイミという小生意気なポケモンをグラシデアの花の咲く花園に連れていく旅で見たことはあったが、敵として立ちはだかるところまで威圧感があるとは。しかし、そのプレッシャーもディアルガやパルキアに比べれば大したことはなく、さらに自分の味方にはミュウツーがいることからサトシの心に怯えはない。

「いくぞミュウツー、はどうだん！」

先制したのはミュウツーで、レジギガスはその巨体さ故に機敏な動きはできず、大きな的になりミュウツーのはどうだんを躲すことは出ずクリーンヒットする。だが、レジギガスの持ち味は巨軀を活かした攻撃力と耐久力である。さらに自分のポケモンがタイプ相性の悪い技を受けたというのにタクトの表情には焦りや憤りはなく、口角を上げレジギガスに指示を下す。

「レジギガス、身代わりだ」

『ギガガガ』

ピコピコと機械のような音を出したレジギガスはその場に自らの分身を作り出す。自分のHPを4分の1削って、身代わりを作り出すという技であるが、かくとうタイプの技を覚えているミュウツーには瞬殺できる獲物であった。

『おつとー！ミュウツーのはどうだんで早くも身代わりが消えてしまったー！』

しかし、タクトは続けてレジギガスに身代わりを出すように指示し、レジギガスはそれに応える。なんのつもりだとミュウツーは眉根を寄せるも再びはどうだんを放って身代わりを消し去る。観客はミュウツーの圧倒的な力に歓声を上げるが、ミュウツーと同じくタクトの行動に疑問を感じたトレーナーは少なくない。サトシも一切こちらに攻撃を加えてこないレジギガスに対して首を傾げる。

『サトシ』

「ミュウツー？」

3度身代わりを出現させたレジギガスにミュウツーは一旦地面に降りてサトシに声をかけた。

『ヤツらは何か考えがあるらしい』

「みたいだな」

『どうする？』

普段のミュウツーならここで他人に思慮を他人に預けたりはしない。しかし、今の彼はサトシのポケモンだ。サトシを信じて敵を撃ち破る矛として、彼はサトシの指示を待つ。

「…長期戦はまずそうだな。身代わりを出すより早くはどうだんを撃てるか?」

『やってみよう』

すると、ミュウツーは今まで両手のエネルギーを収束させて撃つていたはどうだんを片手のみで放つと、右手左手で交互に放つ。その姿はまるで連続でミサイルを放つようであり、流石のレジギガスも身代わりが消滅してすぐに着弾するはどうだんは自分の身で受けるしかない。

『おーっと！レジギガス！ミュウツーの猛攻に守るのが精一杯か!』

白熱する実況に観客もヒートアップしていく。サンドバッグになるレジギガスに、これはミュウツーの勝ちだろうと確信した時、サトシとミュウツーに冷や汗が流れる。嫌な予感というのは思いの外当たってしまったもので、ミュウツーがはどうだんの連射をやめるとサトシは彼にすぐさま空へと跳ぶように指示を出した。

「いい判断だ。だが遅い」

クスリと微笑んだタクトに呼応するようにレジギガスが土煙から飛び出してくる。それも巨躯な身体からは考えられないスピードでだ。ミュウツーが空に逃れるよりも早く巨大な3本の指でミュウツーの脚を掴んだレジギガスは目を光らせる。

「ミュウツー!!」

「レジギガス、にぎりつぶす」

その瞬間フィールドからバキバキと骨が砕ける音が木霊する。あまりの急展開に観客は動揺し、サトシはミュウツウの安否を心配し大きく声を上げた。

『…久しぶりの痛みだな』

しかし、伝説のポケモンに数えられるだけあってミュウツウの顔には苦悶はなく平静にレジギガスの手から逃れる方法を考えていた。

「なんだよあのスピード!? 罰金だ罰金!」

「どうして急に早く…」

「タクトさんの作戦か、あるいはレジギガスの特性か何かなのか…」

一方、サトシを応援する3人は各々にレジギガスのスピードに驚きの声を上げていた。ジュンは身を乗り出してレジギガスに文句を言い、ヒカリはそのスピードに疑問を呈し、タケシは冷静にレジギガスの動きの謎を解き明かそうとしていた。そして、その予想は後者が正解であった。

「レジギガスの特性はスロースタート。バトル開始数分は動きが鈍いが、時間が経過すれば本来の力を発揮できるのだよ」

「だから身代わりで時間を…」

「その通り…レジギガス、ミュウツウ投げ飛ばせ!」

レジギガスは指示通りミュウツウを投げ飛ばす。それも空中ではなく、地面におもいっきり叩きつけるようにだ。ラティオスの放ったりゅうせいぐんにより凸凹になった地形に背中から落ちたミュウ

ツーはすぐさま片足で立ち上がる。

「大丈夫かミュウツー！」

『……』

サトシの問いかけにミュウツーは答えない。大丈夫ならば頼もしい一言でも言つてやるところだが、どうやらそんな言葉は吐けそうにもない。動きが鈍いからと油断していたが、レジギガスもまた伝説に名を刻んだポケモンなのだ。スロースタートが解除された今のレジギガスの能力はミュウツーを上回るものになっており、流石のミュウツーもこれには冷や汗を流すしかない。はどうだんでHPをいくらか削つたとはいえ、不気味なタフさがあるレジギガスが次のはどうだんで倒れる保証がない。はどうだんを当てるよりも先に自分の全身の筋繊維と骨格がバラバラにされるのが早そうだと予感したミュウツーの後ろ姿をサトシは見つめるとモンスターボールをかざした。

「ありがとうミュウツー」

『……ああ』

こればかりは自分の出る幕ではないとミュウツーはサトシの言葉に従うことにした。たつた一撃というのに、自らの脚は碎けて立つだけで精一杯で、体力はなくなり浮くことすら叶わない。

おそらく、ラティースはもちろん、あのギラティナやルギアでもこの巨人を下すのは難しいだろう。ピカチュウなら踏み潰され、ラティースとルギアなら撃ち落とされ、ミュウツーなら握り潰され、ギラティナで良くて相討ちであろう。しかし、1匹だけレジギガスを完封することが可能なポケモンがいる。ミュウツーは最後にテレパシーでそれを伝えると膝をついて静かに倒れた。

『ミュウツー戦闘不能!』

あまりの急展開に言葉を失う実況。サトシも暗い面持ちでミュウツーを戻した。一気にタクトペースへと引き戻され、絶体絶命のピンチのサトシをヒカリやタケシ、シンジやシロナ達が見つめる中、サトシは次のポケモンに手をかけた。

「ミュウツーの思いは無駄にしちゃいけない。頼むぞ」

シンオウリーグ準決勝、スズラン大会にて猛威を振るうレジギガスに対してミュウツーの残したメッセージとは。バトルはまだ続く。続くとしたら続く。

……T o b e c o n t i n u e d

サトシの奇策！ いけピカチュウ！

レジギガスの圧倒的強さにあのミュウツーが倒れた。観客席でサトシを見つめるタケシとテレビの前で手に汗握りながら応援していたカスミはミュウツーの強さを知っていた故に、開いた口が塞がらない。ヒカリもスロースターターが解除されたレジギガスのスピードとパワーに驚くしかなく、その瞳をサトシへと移す。

ここまでのバトルはサトシはポケモンたちとポテンシャルを引き出し、信頼とサトシの経験にヒットアンドウェイよりもヒットあるのみのバトルスタイル。対してタクトは捕まえた伝説のポケモンを彼の育成理論に基づきバトルに適した肉体へと昇華させ連勝を重ねてきた。

内心、タクトもサトシが伝説のポケモンを使ってきたことに焦りを感じていたが、それもレジギガスがミュウツーを圧倒するサマを見て消えていた。スロースターターという弱点を持つレジギガスだが、その分破格の攻撃力で敵を倒し、逃げて身も残らないスピードで逃さない。彼はそんなレジギガスを心底信用しており、スロースターターで短期決戦に向かないという点を除けば、実質などころエースと言っても差支えないポケモンであった。

しかし、それもレジギガスを一撃で葬る。または、スロースターターの外れたレジギガスをも凌駕するパワーとスピードを持つポケモンがいれば話が変わってくるが。

「さて、サトシくん。次のポケモンは誰かな？」

自信を取り戻し勝気な笑みを浮かべるタクトにサトシはあるモンスターボールを見つめる。残っているのはピカチュウとルギア、それに手負いのラティアスにミュウツーが全てを託したポケモンの4体。ミュウツーのメッセージに従うならここで出すポケモンは決まっている。しかし、タクトに残りポケモンがいる状態を出すのは気が引け

た。万が一ということがあれば、こちらの劣勢は続いてしまう。ならばとサトシは手をかけていたモンスターボールから離れ、いつも自分のそばに居る相棒を見た。

「……頼めるかピカチュウ」

「ピカ?……ピカツチュウ!」

サトシの呼び掛けに応えたピカチュウはバトルフィールドへと立つ。

『な、な、なんと!?!サトシ選手ここでまさかのピカチュウだ!あのレジギガスを相手にピカチュウです!!もう伝説のポケモンはいないのでしょうか!?!』

ビックリ仰天といった様子の実況と同じく観客も驚きを浮かべたり、顔を顰めた。それは誰もがミュウツーを倒したレジギガスを普通のポケモンであるピカチュウには倒せないという確信があったからだ。

だが、観客の中にはサトシの采配を即座に否定せず意図を探る者もいた。

「まさかあいつ……」

シンジは腕を組みながらサトシの作戦を予測する。その予測はチャンピオンであるシロナも思い至っており、面白いと思いつつもその可能性と低さに眉を顰める。

「ふふつ、そんな小さなポケモンでは私のレジギガスは倒せませんよ……」

穏やかに囓うタクトにサトシは真つ向から目を向け、ピカチュウに命令を下した。

「ピカチュウー！10万ボルト！」

雷の魔獣と呼ばれ、サトシとこれまで苦楽を共にしてきたピカチュウの10万ボルトがレジギガスへと放たれる。対してタクトはレジギガスに回避や防御の指示を出さない。直撃し、黒い煙が上がるも現れたレジギガスは当然のように五体満足であり、ピコピコと点字のような目を光らせる。

「効いてない!？」

「やはり能力の差が大きいのか…」

幾度となくピカチュウの10万ボルトがポケモンを葬っているのを見てきたヒカリはその一撃がレジギガスに対して全く効果がないことに声を上げ、タケシは冷静にピカチュウとレジギガスの差を指摘する。そもそも、大きさが違い、さらにはポケモンそのものが持つている能力の差があるのだ。たとえ同じレベルであったとしても、その能力は決して同じとは限らない。

「だが、サトシの作戦が上手く当たれば…」

小さく呟かれた期待の言葉はレジギガスの猛攻を避けつつ、10万ボルトを浴びせるピカチュウに向けられた。小さくすばしっこい利便性を活かしたバトルスタイルに流石のタクトもその顔には憤りが出てきた。10万ボルトのダメージは微々たるものでも、何度も食らっていればその弊害は出てくる。そこで慢心していたタクトは遅れてサトシの真意に気付いた。

「まずいレジギガス、早々に決めろ！」

タクトの声にレジギガスはピカチュウにしっかりと狙いをつける。踏み潰すのではラティアスが大量に残したクレーターの跡に邪魔される可能性がある。なのでレジギガスは先程のミュウツーと同じくにぎりつぶすによる確殺を行った。

「ピカチュウー！10万ボルト!!」

とうとうレジギガスに掴まれたピカチュウだが未だに勝利を諦めず稲光を出し続ける。それ？を抑えようとグググ…と力を込めるレジギガス。そしてついに彼の腕から稲光が見えなくなり、レジギガスが手を開く。

「ピカチュウ!!」

どさりと地面に落ちたピカチュウの目はグルグルと回っており、力尽きたことを如実に表していた。審判はピカチュウが倒れたと判断すると旗をあげる。レジギガスの2タテに観客が湧き、タクトに再び自信が灯る。しかし、それもほんの僅かな間だった。

『ん？なんだ!?!』

先に気づいたのは実況で、観客も飲まれるように困惑の声を上げ始めたところでタクトはレジギガスをみた。するとどうだろう。

「どうしたレジギガス!?!」

レジギガスが膝を着いていた。タクトにとって幸いだっただのはそれは敗北ではなかったこと。だが、その後にレジギガスからバチツと静電気が走ったのを見て「まさか」とつぶやく。レジギガスのその向

こう。今、自分と戦ってるトレーナーの顔を見た。ピカチュウを抱いて所定の位置に戻ったサトシは勝利を諦めた目ではなく、これからだという強い意志を感じさせるものであった。

タクトはゴクリと喉を鳴らし、自分の手に汗が滲んでいることに気づく。

「なんだこれは…」

自分から湧き上がるこの気持ちの正体が分からない。焦り？高揚？怒り？あるいは全てか？

「ちよつとちよつと、アレどうなってるのよ」

「アレはピカチュウの静電気だにや」

「静電気？」

場所は変わって観客席でジュースやお弁当を売りさばく3人組の会話へと移る。3人はピカチュウが出てきてからというものの足を止め魅入るようにして彼の活躍を見つめていた。

あれだけのサイズ差に怯えることなく果敢に挑むその勇姿。何度も何度も10万ボルトを叩き込む精神力、持久力。倒れてもなおその爪痕を残していった彼に3人は改めて”あのピカチュウは強い”と再認識した。

「ピカチュウに直接接触すると麻痺状態になるんだよ」

「ああ、だからレジガスの動きが急に動かなくなったの」

「痺れて動けないんだにや」

「てかじやあの10万ボルトは?」

「ダメージを与えるのが目的ってより麻痺を狙ったものだったんだろ
うな」

赤髪の女の質問に青髪の男が答えると、女は「ふーん」とサトシを
見る。これまで彼が挑戦してきた大会には売り子として観客に紛れ
てきたものだが、傍目から見ても確実に成長しているのは分かってい
たがここまではと感心させられる。

「ジャリボーイのポケモンは?」

「あと2匹にや」

ここからどうするのか。それはサトシにしか分からない。どう転
ぶか分からなくなったシンオウリーグスズラン大会。戦いは続く。
続くとしたら続く。

……T o b e c o n t i n u e d

ルギア 爆誕!

ピカチュウの技と特性を活かし、レジギガスの動きを封じたサトシ。しかし、ポケモンが残り2体のサトシに対し、タクトはレジギガスを抜いても3体残している。劣勢に陥っても諦めないサトシはタクトに勝てるのか……。

「これは驚いたな…」

レジギガスを麻痺にさせられ、タクトから出てきたのは素直な賞賛であった。タクトは手持ちの全てを伝説のポケモンにしていたが、それでも慢心せず対戦相手のスタイルやポケモンのリサーチは行っていた。その中で自らのポケモンを1匹でも倒せる可能性があったのはシンジ、次いでサトシであった。それでも戦力差は歴然でせいぜいダークライかラティオスが倒される程度に考えていた。

しかし、現実にサトシと対戦すると彼もまた伝説のポケモンを持っており、野生以外で初めて伝説のポケモンと対峙することになった。高揚感があっても、プレッシャーはなくミュウツーやギラティナといった名だたる伝説のポケモンに怯えることなくタクトは勝ちをもぎ取った。

「嬉しく思うよ。君と戦えたことを」

そして、サトシの残りポケモンは2体。これが実質的な決勝戦だと微笑んだタクトは先程までの余裕を捨て、サトシに全力で挑む。

レジギガスを戻そうかと考えたが、ミュウツーやピカチュウからのダメージもある。それに麻痺状態に陥っているレジギガスを戻すのは得策ではない。ならば、サトシの5体目を引きずり出して、レジギガスには退場してもらい確実な勝利を得る。それがタクトの描いた勝利の方程式であった。

「さあ、次のポケモンは何かな」

だがしかし、それはほんの数分で瓦解することとなる。

###

『レジギガスー！ついに戦闘不能！ミュウツーとピカチュウを倒した巨人は海の神によって倒されてしまいました!!』

サトシの5体目のポケモン、それは幻のポケモンとされ、海の神の異名を持つルギアであった。白と青の流線的なフォルムに、雄々しい目、大きく力強い翼を持つその姿はその異名は伊達ではないと思わせるに十分であった。

開幕、レジギガスをハイドロポンプで倒したルギアに対し、タクトは仕方ないと割り切った。スローススターター解除までミュウツーの技を耐え凌ぎ、ピカチュウの10万ボルトを受け続けたのだ。それでルギアに倒されるのは自明の理であると結論つけたタクトはレジギガスを戻すと次のポケモンを出す。

「ゆけ、レックウザ！」

ハイパーボールから現れたのは緑色の皮膚に黄色の紋様の入った蛇のような体躯のポケモンで、ルギアと同じく滞空し彼を睨みつける。

『タクト選手4匹目のポケモンはレックウザ!!ここにきて飛行タイプ同士の対決となりました!』

睨み合うレックウザとルギア。前者が咆哮するとルギアは静かにサトシからの指示を待つ。意外にも先に動いたのはタクトであった。

彼はレックウザにげんしのちからを使わせる。ひこうタイプであるルギアにげんしのちからは効果抜群であり、タイプ一致でそこまでの威力はなくても残り2体とあとがないサトシにとってはここは避けたい。

「かわせ！」

ルギアは難なくその技を躲し、レックウザの上を取る。

「こつちもげんしのちからだ！」

サトシの指示通りげんしのちからを使う。だがそれは当たることには無かった。レックウザは身体を器用にくねらせその場から動かず全ての石を躲すと獰猛な笑みを浮かべる。

「今度はこちらだ。レックウザ、げきりん！」

げきりんとは高威力を誇るドラゴンタイプの技で、我を忘れるほどの執拗な攻撃を繰り返すというものだ。連続攻撃が可能であるがその高すぎる威力の反面、攻撃後混乱に陥ってしまうのがネックとなる。しかし、タクトにはその前にルギアを倒しきれるという自信があった。長く強固な鱗を持つ身体でルギアへと向かっていく。

だが、タクトもレックウザも侮っていた。

ルギアは海の神と呼ばれる由縁を。

通常に伝わっている個体よりも遥かに強い「神」と称させる強さを持つ伝説の三匹の鳥ポケモンを圧倒する力を。

「な!？」

レックウザがルギアに接近するよりも前に、ルギアは大きく羽根を

広げるとそれをレックウザへと向けた。すると、レックウザの長い身体は大きく吹き飛ばされてしまい、技を発動することが出来なかった。風圧だけでレックウザの技を解除したルギアの凄さに会場は「おゝゝ!!」と盛り上がりを見せる。一方、自慢の技を風ごときで封じられたレックウザは歯噛みし、その持ち主であるタクトは驚きの声を上げる。

しかし、まだ戦いはこれからだと気合いを入れ直したタクトとレックウザに、ルギアは太陽を背をして彼らを見下ろす。圧倒的な威圧感と強者の風格を漂わせるルギアの姿に、先程まで闘争心に満ち溢れたレックウザにはどこか汗が浮かんでいるように見え、タクトも眩しいのかそれとも焦りを感じているのか浮かべている表情はとても険しい。

そして、ルギアとサトシはそんな彼らを真正面から見据えた。もう残りわずかなポケモンしかないというのにその顔には必ず勝利をもぎ取ると決意と本気が感じ取れる。ルギアは竦んだ彼らに対して挑発とも取れる警告を促す。

「いのちをかけてかかってこい」

生半可な気持ちでは私には勝てない。ルギアは暗にそう語り、それはまさにその通りであった。

###

『つ、強い……！ルギア！レックウザを一撃でノックアウト!!』

「スゲーー!!?」

「海の神様ヤバすぎるだろ!!!」

会場から大歓声上がり、タクトは苦闘の表情が浮かべながらボロボロになった雑巾のように地面で伸びているレックウザをモンスターボールに入れた。顔を上げると地面に足をつけたルギアがサトシと仲つむまじく何やら話している。周りの声でその内容はうかがい知れないが、サトシの顔を見るにルギアの健闘を褒めているのだろう。

(一瞬だった……)

それに対してタクトは拳を握りしめた。不覚だったと、自分の力を過信しすぎた自分に憤りをかんじた。あの挑発を受けてレックウザは怒りを剥き出しにし、タクトも負けじとルギアに果敢に挑んだ。しかし、結果はこの通りだ。レックウザがルギアの上を取った瞬間であった、それを狙っていたかのようにサトシからルギアへの指示が出たのだ。

(エアロブラスト……なんて威力だ)

きつとサトシは最初から狙っていたのだろう。恐らく、上から放てば会場が倒壊する恐れがあったので、それを避けるために頭に血が上ったレックウザを空へと上げたのだろう。それに気付かず、易々とレックウザを倒されたのはタクトの失態であった。自分がまだまだ未熟ものであると感じずにいられないタクトは彼らを眩しいものを見るように見つめる。これは力の差なのか、それとも絆の差なのか。タクトはこれまで自分がポケモンと過ごした時間を思い返す。伝説のポケモンのトレーナーになったからと慢心していたのではないか、勝手にチャンピオンになった気ではないのか。

伝説のポケモンが普通のポケモンより強いのは当たり前だ。今までダークライのみで連戦連勝を重ねていたタクトがそれはよく知っている。けれど、同じ伝説のポケモン同士の戦いがここまでとは思わ

なかった。しかも、サトシは1匹だけ普通のポケモン…ピカチュウを投入してきた。それが自分との力の違いなのかとタクトは考える。

「これはもう油断出来ないな…」

ボソリと湧き上がる会場の中で呟いたタクトは5体目のポケモンが入ったモンスターボールへと手をかける。全ては目の前にいる自分史上最強のライバルに勝つために、今までの自惚れていた自分を捨て去るために。慢心を捨てたタクトはサトシを睨みつける。

——伝説、幻ポケモン大決戦となったシンオウリーグスズラン大会準決勝。残りポケモンが共に2体となったサトシとタクト。いよいよラストスパートとなったバトルに勝つのは一体どちらなのか……。

バトルは続く。続くつたら続く。

……To be continued

華麗なるフォルムチェンジ デオキシス!!

ポケモンリーグ、シンオウスズラン大会は混乱を極めていた。大会初日、それは素晴らしい快晴で大会の成功を予感させるような希望に満ちた空であった。整ったバトルフィールドに、様々な思惑を浮かべるトレーナー達。審査員や大会実行委員、そしてチャンピオンのシロナはこれこそがポケモンリーグのあるべき姿であり、大会が進むにつれてバトルは苛烈さを極め、観るものを熱狂させる。

そういう意味では、今回の準決勝にはそれに合っているだろう。しかし、それはシロナや実行委員の想像を遥かに超えるものであった。最初の誤算は幻のポケモンダークライだけでジムを制覇し、全てのバトルに勝利しているタクトの存在だった。大会実行委員は使用ポケモンに規定を設けていないため、これを容認。結果として、タクトの無双が始まり、最終的にダークライのみで彼が優勝するかに見えた。

そこで2つ目の誤算、マサラタウンのサトシである。彼はカントー地方からオレンジ諸島、ジョウト地方、ホウエン地方と様々な地方を旅し、それぞれの地方のポケモンリーグへと挑戦している。さらにはバトルフロンティアを制覇するなどの快挙も成し遂げており、大会本部やシロナは彼も優勝候補の1人であると考えていた。実際に準々決勝で見せたトバリシテイのシンジとのバトルは世界中のトレーナーの心を揺さぶったものであろう。

しかし、そんなサトシもタクトという存在に危ぶまれることが予想されていた。だが、ここで彼もまさかの伝説ポケモンを使用したのである。

これには世界中のポケモン研究家が目を飛び出させ、片目で見erkらいだった中継を録画しだし、サトシやサトシの手持ちに入っているポケモンを知る者達は彼にコンタクトを取ろうと図ったり、さらにはスズラン島へのチケットを買い求めに走っていた。

コトブキシテイのコトブキテレビはバトルの勝敗に関係なく、2人にインタビュアーを決行しようと様々な機材を用意して彼らのバトルが終わるのを今か今かと待っていたのだが。

「ダメです、これも使えません!」

「ウソ!?なんで!」

激化するバトルで放たれた技の数々は彼らの機材に少なからず影響を与えており、先程ルギアの放ったエアロブラストの極わずかな衝撃波によってレックウザと同じく完全に沈黙した。

また、バトルの様子を捉えているカメラもレンズは傷つき、ザザと砂嵐が走るほどにダメージを受けていた。新しいカメラに取り替えるためにタクトが次のポケモンを出すまでの間に取り替えていると、彼は空へとモンスターボールを放り投げた。

現れたのはこれまた空を飛べるポケモン。しかし、そのデザインはレックウザやルギアと比べて異質であった。

赤と青のうねった触手のような腕に胸にある水色の水晶とまるでポケモンというよりは人に近い。宇宙人がいればこんな感じかと実況者は考える。

『え、えーっと、なんででしょうか、あのポケモンは…… ええ、はいはい。あ、デオキシスというポケモンのようですよ! これまた見慣れないポケモンです!!』

実況者の困惑は観客も同様で、ルギアやレックウザのようなカッコ良さよりは不気味さ異質さの目立つデオキシスに瞬きを繰り返す。デオキシスの存在を認知しているサトシやタケシ、ロケット団やハウエン地方から見守っているハルカやマサトも自分の知っている個体ではないにしろ、どの個体も破格の強さを持っていたデオキシスが現れたことに少なからず驚きを浮かべていた。

「どうやら君はこのポケモンも知っているんだね」

「ああ、何度か会ったことがある」

ポケモンレンジャーのヒナタと異変調査を手伝った時やバトルタワーで行われるバトルに出るために訪れたラルスシティ、さらにはシンオウ地方でもある無人島で傷ついている個体とも出会ったことがある。しかし、タクトのデオキシスそのどれとも合致していないように見える。あれだけ闘気に満ち溢れたデオキシスをサトシは知らない。けれども、会ったことがあるという事実だけで十分なタクトは「やはりね」と呟く。

「だったら、こいつの強さも知っているよね！」

瞬間、デオキシスの姿が変わる。

『な、なんだあ!?!』

わけもわからない実況者は素つ頓狂な声を上げ、その間にデオキシスは空気抵抗を限りなく少なくし、細身で身軽となった形態……スピードフォルムに姿を変えるとルギアに迫る。一瞬、ルギアの前まで突進してきたデオキシスであったが、瞬時に方向を変えルギアの背後に回る。

「デオキシス、でんじほう！」

そして、さらに技を放つ瞬間にまた姿を変える。最初、高速形態と比べ刺々しく攻撃的な印象を受けるアタックフォルムへと変わり、その姿になることによってエネルギーを最大にまで高めたでんじほうルギアへと着弾する。

「ルギア!!」

避ける間もなく背中にもとんでんじほうを受けたルギアは苦痛に顔を歪める。すぐさま後ろを振り返し、ハイドロポンプを放つがデオキシスは避ける素振りを取らず、またも姿を変える。

『今度は何だアーー!?』

実況者と観客はデオキシスの次なる姿へと注目を集める。刺々しい体は丸く厚みを持った見た目へと変わり、売って較べて地味な印象を受けるもデオキシスはルギアのハイドロポンプを平然と受け止める。その様に観客は大きく湧いた。

『す、すごい！デオキシス、ルギアのハイドロポンプをまるで虫に刺された程度のように！簡単に受け止めました!!』

瞬時に姿を変え、その都度適切な対処を行ってくるデオキシスとタクトのコンビネーションにサトシとルギアの額に汗が浮かぶ。接近や回避はスピードフォルムで、攻撃はアタックフォルムで、防御はデイフェンスフォルムでとデオキシスのアイデンティティを存分に発揮する戦いにサトシは笑わずにはいらなかった。

「何がおかしいんだい？」

「だって、こんな強いポケモンと戦えるんだ…。」

サトシの思いは同じくポケモントレーナーであるシンジやジュン、シロナにも伝播していた。ポケモントレーナーの真髄はポケモンを育てて戦わせ勝つこと。しかし、ただ勝つだけでは面白くない。強い相手と戦い、競い合い、均衡したバトルにおける接戦でも、大差のあ

るバトルでの逆転勝利もトレーナーにとっては楽しみの一つだ。そして、全てのフォルムを巧みに使いこなすデオキシスはまさにポケモントレーナーとしての技術が試される相手であり、サトシはその興奮を抑えらず、帽子のつばを前から後ろに向けた。

「燃えないわけにはいかないぜ！ルギア、サイコキネシス！」

サトシの指示通りルギアはサイコキネシスを使うが、デオキシスは姿を変えてルギアの視界から消える。

「ルギア、目で追うな！音を聴くんだ！」

デオキシスの行方を追おうとしたルギアだが、サトシの言葉に彼は耳に意識を集中する。目で追えば、視界を動かした一瞬で死角へとまわったデオキシスからの攻撃がやってくる。ならば、耳をすまし音だけでデオキシスを感じる。それがサトシの出したデオキシスのスピードフォルムへの対策であった。

「そこか！」

目を閉じたままルギアは誰もいない虚空へとハイドロポンプを放つ。傍から見ればルギアのミスにしか見えないが、しかしハイドロポンプの眼前でデオキシスが急ブレーキをかけた。

『す、凄い！ルギア、本当に音だけでデオキシスの移動方向を探し当てていたー！惜しくも当たらずでしたがこれはすごい!!』

ルギアの攻撃はデオキシスに当たらなかったが、それでも動きを止めることに成功する。睨み合ったデオキシスとルギアは共に動かず、主の指示を待つ。そして、タクトが「でんじほうだ！」と叫ぶとデオキシスはまたも高速で動き姿を消す。

『お、おおっと、なんだこれは！で、デオキシスが！ふ、複数！』

更には超高速で動くことによつてかげぶんしんを使わずに自らの分身を生み出す。パツと見では見分けのつかない程にその分身は完成されており、全てのデオキシスがでんじほうのチャージに移行する。

「まさかスピードフォルムのままで打つのか」

「させるか！ルギア、ふきとばせ！」

タケシのつぶやきにまるで答えるように呼んだサトシ。ルギアは大きな羽を動かし、分身したデオキシスへと向ける。スピードフォルムになり身軽になったデオキシスは僅かにふらつくもタクトによつて鍛えられており、そう簡単には分身を消すことはしない。四方八方から放たれたでんじほうはルギアへと直撃する。

「ルギア！」

狼煙の中から現れたルギアの身体にはダメージが浮かんでおり、その顔にも疲れが見て取れる。歯噛みするサトシにタクトは余裕そうにデオキシスに指示を飛ばす。

「次で決めろデオキシス！サイコブースト！」

分身を維持したまま、アタックフォルムへと移行したデオキシスは胸のコアから発したエネルギーを触手のような腕で大きく広げる。明らかにでんじほうを超える破格の攻撃であるが、本体を判別できてないルギアに避ける術も守る術もない。

逆転ムードから一転してまたもピンチに追い込まれたサトシとル
ギア。果たして彼らの行く末は。シンオウリーグ、波乱の準決勝はま
だまだ続く……………

……………T o b e c o n t i n u e d

激突！ルギアVSデオキシス！

シンオウ地方ポケモンリーグスズラン大会準決勝、サトシとタクトのバトルは苛烈を極めていた。お互いに繰り出すは伝説、幻のポケモン達。白熱したバトルもついに5体目を迎え、海の神ルギアと宇宙からの来訪者デオキシスとの一瞬の瞬きも許されない空中戦が繰り広げられていた。

様々な姿へとフォルムチェンジを行い、ルギアを翻弄するデオキシスはスピードフォルムでの分身を維持したまま、アタックフォルムへと移行し、胸のコアから発したエネルギーを触手のような細くしなやかにうねらせた腕で大きく広げる。

「これで終わりだ！」

デオキシス最高の技、サイコブーストがルギアへと襲いかかろうとする。しかし、サトシとルギアの目はまだ死んでいない。諦めない心による逆転に次ぐ逆転。それがサトシの真骨頂で、多くのジムリーダーやライバル達をうならせるほどのバトルを繰り返してきたサトシは未だに勝機を見逃さず、デオキシスを注意深く観察する。

「デオキシス、サイコブースト！」

エネルギーをMAXにチャージしたデオキシスの分身体、その数10体がルギアへとサイコブーストを放つ。そして、その一瞬でサトシはとあることに気づいた。

「ツールギア！右に避けるんだ！」

サトシの指示に従って、ルギアはすぐさま右方向へと大きくつばさを広げて飛翔する。放たれた10個のサイコブーストのうち、9個が

ルギアへと直撃するもそれはまるで実体を持たないかのようにすり抜けていく。それにタクトとデオキシス、さらには観客やルギアですら目を見開く。そして、当たらなかつたひとつ、実体を持っていたサイコブーストはスズラン島沖の海中へと大きな水しぶきを起こしながら落ちていく。

「な、なんだと…」

狼狽えたタクトは自信満々に微笑むサトシを睨んだ。

「なぜだ、なぜ実体が!？」

「サイコブーストを放つ一瞬、1体だけ先行して撃ってるやつがいた。それが実体だと思って賭けに出たんだ」

ニヤリと笑うサトシだが、帽子に隠れた額には汗が滲んでいる。自分の見間違いかもしれない。本当にアレが実体なのかは定かではなかった。しかし、あのまま何もしなければこうはならなかつた。自分の方に流れ再びやってきたことを感じたサトシはルギアへと櫓を飛ばす。

「よし、ルギア反撃開始だ!!」

吠えるルギアにデオキシスは分身を維持したままでんじほうの構えをとる。

「なるほど、確かに」

ルギアのそのつぶやきにデオキシスはわずかに反応を示す。宇宙から来たデオキシスは地球の言語に精通していない。タクトと共に過ごして言っていることは理解出来ても自らの言葉を返すことは出

来ない。だから、表情だけでルギアに「どういふことだ」と尋ねた。すると、ルギアは今の主のように大胆不敵に口角を上げる。

「なに」

刹那。ルギアは言葉を継ぐよりも先にデオキシスへと迫る。アタクフオルムのデオキシスはルギアの突進に反応出来ず突進をまともに喰らい、うしろへととばされるも直ぐに体勢を整える。

「先行して動くのが実体、というのは間違いないようだと思ったただだ」

吹き飛ばされたデオキシスは自分の分身が消えていることに気づく。今度は精度が高く、先行して動く個体など存在しないほどの完璧な分身を作ろうとスピードフォルムへと変わろうという時、下にいるサトシからルギアへと命令が下される。

「今だ、ルギア！ハイドロポンプ!!」

ルギアの口から大量の水がすごい勢いで放たられ、その水流の速度、威力はデオキシスがフォルムチェンジするより早く迫り、またもデオキシスへと直撃し、後ろへと下がらされる。

「これがお前のもうひとつの弱点。フォルムチェンジ前は隙だらけになるということだ」

ただ無駄にダメージを受けていたわけではないと海の神は威圧するようにデオキシスへと言葉を投げかける。それにデオキシスは生まれて2度目の怒りを顕にした。一度目はタクトにゲットされた時。その時は自分よりもつよかったダークライに鎮められたが、今は違う。タクトの元でトレーニングを行い、ダークライにも勝てるほどの

力を得たデオキシスは身体の中で煮えたぎる怒りを燃やし、スピードフォルムへと変身するとすぐさま分身を作る。

「デオキシス、サイコブーストだ!!」

先程よりも遥かに強大で、コアから発生させたエネルギー全てを注ぎ込んだサイコブーストをほんの数秒で完成させたデオキシスにルギアは主の指示でエアロブラストの構えをとる。

デオキシスの思惑通り、今回作られた分身に落ち度はない。寸分違わない精密さ、スピード、波長を合わせた動きにサトシは瞑目する。目で見てわからないなら、音で感じる。耳で聴き取れないなら、心で感じる。

目を見開いたサトシは大きく叫んだ。

「後ろだ!!」

その声が届いた時、ルギアは後ろを振り向きながら距離をとり、エアロブラストを放つ。デオキシスもまた、サイコブーストを発射し、巨大な爆発がシンオウ地方の大空で炸裂した。

###

雲ひとつない空は2体のポケモンの放った必殺の一撃のぶつかり合いで起こった爆発により黒い煙に覆われた。そして、その原因である2体は互いに傷を負いゆつくりと地面へと降り立つ。海の神と呼ばれるルギアも連戦に加え、フォルムチェンジを扱うトリッキーなデオキシスとの戦闘で大きく疲弊していた。それでも、その身を地に預けず、自らの脚で立っている姿はまさに勇猛であり海の神に相応しいであろう。一方、エアロブラストを咄嗟にディフェンスフォルムで受け止めたはいデオキシスも、胸のコアという急所に当たったが故に想像以上のダメージを負っていた。

そして、先に地面に倒れ伏したのはデオキシスであった。

『す、すごい！ル、ルギア！空前絶後の空中戦を制してタクト選手の5体目も撃破！これが海の神の力なのかー!?!』

熱狂する実況にところ忙しと湧き上がる観客たちはルギアの勇姿に感動すら覚える。タクトはデオキシスをモンスターボールに戻すと歯を強くかみしめ、拳を握った。

まさか自分が先に追い込まれるとは思ってもみなかったと、6体目のポケモンが入ったモンスターボールを掴む。

「すごい。すごいですよ、サトシくん。見事なバトルです」

「……」

タクトからの賞賛にサトシは何も答えない。

「けれど、勝つのはこの僕です。まさかこの子をトレーナーとのバトルで使うとは思いませんでした……後悔はしないでくださいね」

タクトは腕を大きく振りかぶると、モンスターボールを投げる。モンスターボールが開いて中からポケモンが飛び出した瞬間、会場に身の毛がよだつような寒気が走る。気温が一気に下がり、氷点下まで下がったのではないかと思うほどの気温下降に会場の誰もが身を縮こまらせ自らの腕を摩った。

「ヒュラララ!!」

現れたポケモンが咆哮を上げると、会場に霜が降り始める。凍てついた氷で覆われた左右非対称で歪な身体をしたそのポケモンは再び大きく吠える。

「なんなんだあのポケモンは……」

タクトの6体目はこれまで様々な地方で旅をしてきたサトシが見たことの無いポケモンであり、考古学者であるシロナやポケモン博士の権威であるオーキドですらそのポケモンの詳細は分からなかった。

空気とともに静寂に包まれた会場に君臨した謎のポケモン。一体このポケモンは何なのか。果たしてサトシはこのポケモンに勝つことが出来るのか。

……T o b e c o n t i n u e d

降臨、アルセウス！

「なんなの、あのポケモン…」

凍える身体を摩るのを我慢し、ピンク色のポケモン図鑑を取り出したヒカリは画面に表示された『ERROR』の文字に驚きを隠せず、ポツリと呟く。

シンオウリーグスズラン大会準決勝もいよいよ大詰めという場面で現れた謎のポケモンに会場は沈みかえっていた。マントの下にカイロを貼って防寒対策を万全に済ませているタクトと心の熱さが身体が発熱にも関係しているのか半袖でも一向に震えを見せないサトシのみが平静さを保っていた。

「こいつはキュレム。イツシュ地方の伝説のポケモンさ」

「イツシュ地方…？」

聞いたことも無い地方だとサトシは首をかしげる。

「まあここからは距離があるしね。けれど、いいところだよあそこは」

バトルのことは忘れてイツシュ地方の思い出を振り返るタクト。観覧車に大きな橋とパンフレットを入手すれば得られる観光スポットとキュレムのいたジャイアントホールくらいしか行っていないものの、彼にとってはいい思い出に変わりはない。

「さて、決着をつける前にルギアには退場して貰おうか」

ニヤリと微笑んだタクトは手のひらを前に突き出し、キュレムへと命令を下す。

「キュレム、こごえるせかい」

「ヒュオオオオオ!!」

キュレムの周囲に冷気が集まっていき、こごえるかぜの比ではない威力を悟ったサトシはルギアへと回避命令を出す。ルギアは空へと高く上がろうとするも、急激に冷やされた温度によるものか、彼の羽根はわずかに凍りついており初動が遅れる。それでもキュレムから大きく離れたルギアは羽を絶え間なく小刻みに動かすことで氷を溶かそうとする。

「だが無意味だ」

こごえるせかいとはその名の通り、その一帯の空気を凍りつかせる。目の前のポケモンどころか、トレーナー、果てには観客にも被害が及びかねない技である。

「危ないー!」

「ちっ!」

その危険性に気づいたシロナとシンジは腰に付けたモンスターボールを掴み空へと放り投げる。

シロナが出したのはルカリオ、シンジはブルーバーンを繰り出す。

「皆さん!ほのおタイプ、またはまもるを覚えているポケモンを出してください!急いで!」

チャンピオンとして、このバトルを見守る者としてキュレムを止めるべきなのだろうが、能力が未知数な上に、自分の相棒にとって驚異でしかないタイプを持っているためそれも叶わない。ならば、せめて

死傷者が出ないようにとシロナは声を張り上げる。

チャンピオンの言葉を聞いた観客やトレーナー、更には大会関係者はほのおタイプやまもるを覚えたポケモンを出すとキュレムのこごえるせかいに備えた。

—————
そして。

###

「る、ルギア！ 戦闘、不能！」

カチカチと歯を鳴らしながらもルギアが倒れたことを知らせるべく審判は声と共に旗をあげるが、会場からは盛況が漏れることなく、ただ凍りついた空気だけが流れる。

空にいたにも関わらず問答無用とこごえるせかいが炸裂し、氷に覆われたフィールドへとルギアは倒れる。空気が静かに爆発したかのような衝撃を持ったその一撃はシロナの予測通りサトシや他の観客達へと僅かながら襲いかかった。だが、シロナの指示と観客側の素早い対応が功を奏し、死傷者が出なかった。しかし、ほぼ目の前にいたサトシはどうだろうか。こごえるせかいにより発生した白い霧からはサトシが立っていることは分かっても、それが凍りついて身体が動かず直立不動立ちになっているのか離れた観客席からは分からない。

「サトシ！」

ヒカリやタケシが呼びかけるとその影はサムズアップし、身体の無

事を伝える。

その姿に2人はもちろん、シロナや観客席の人間も安堵する。しかし、何故無事だったのかという疑問を起こり、目を凝らしてサトシの姿を目視しようとする。

「ありがとなルギア」

至極穏やかな声でルギアに労いの言葉を向けたサトシはモンスターボールを仕舞い、次のポケモンを出すかと思いきや、タクトへの視線を向けた。その目はタクトへの疑いの目だった。ルギアを倒すだけなら威力を抑えたふぶきやれいとうビームなどでも良かったはずだ。しかし、タクトはあっけからんとしており、サトシへと疑問を投げかけた。

「真正面にいたのにどうして震えていないんだい？」

「それは私が飛び出したからだ」

その瞬間、サトシを包んでいた霧が蒸発するかのように晴れていく。すると中から現れたのは凍傷一つ負っていないサトシと赤い光輪のようなものが腰にある首の長い流暢で尊大な声を轟かせるポケモンであった。

のようなものが腰にある首の長い流暢で尊大な声を轟かせるポケモンであった。

「ありがとうアルセウス。おかげで助かった」

「構わない。大丈夫か？」

「ああ、この通りさ」

笑ってぶんぶんと肩を回すサトシに彼の隣に立つポケモンも微笑みを向ける。そのポケモンに全く見覚えのないタクトは眉を顰めるが階段から走って降りてきたシロナはフェンスギリギリまで迫るとそのポケモンを見上げた。

「あ、アルセウスですって!!!?」

「ち、チャンピオン!？」

「チャンピオンはあのポケモンを知ってるんですか？」

「ええ、もちろんよ!ある伝承では、1000本の腕から宇宙を作ったとされ。またある伝承では、宇宙がない頃に何も無い場所から生まれたとされ。そして、この世界全てを作ったと言われている幻、いや神に等しいポケモン。シンオウ地方に伝わる伝説のポケモン、時を司るディアルガ、空間を司るパルキアを生み出したとされ、さらにはアグノム、エムリット、ユクシーも彼によつて生み出されたという伝承もあるわ」

近くに座っていた観客に尋ねられ、考古学者の知識を早口で熱弁にさらけ出すシロナに周りは少しばかり引き気味である。

それにこれだけでもとんでもない存在であるが、シロナの知らない話で地球を破壊するほどの物量を持った隕石をたつた1匹で破壊するなど、その力はまさに頂点にふさわしいポケモンなのである。そんな手が届くはずのない存在が、今目の前にいる。その現実にシロナは幼い少女のように目を輝かせる。

「…なるほど、君も僕の知らないポケモンを持っているわけか」

そう呟いたタクトは「さあ決着を付けよう」とマントを翻す。それは勝つのは自分だと自信満々に誇っているように見える。だが、見る者が見ればそれは蛮勇である。

「ああ」

サトシは再びタクトに向き直ると帽子を深く被り直す。準決勝、6体目同士。これで決着がつく。だが、アルセウスを知る者にとつてはすでに勝敗は決していた。

「キュレムー！れいとうビーム！」

普通のおりタイプポケモンが放つ威力とは思えない冷気を込めた光線がアルセウスを襲う。しかし、皮膚を太陽の如く燃やしたアルセウスには効いておらずタクトは「ほのおタイプか…ならば」と次の指示を出す。

「キュレムー！りゅうのはどう！」

今大会でタクトが最も多く使用した技であり、今大会1番の規模を持つエネルギーがアルセウスへと放たれる。

しかし、その一撃が当たる前に光輪をピンク色へと変化させたアルセウスはその攻撃を直撃で受けるも全く効いていない。

「ば、馬鹿な……ほのおタイプにドラゴンタイプの技は抜群でなくとも直撃ならダメージが……」

驚愕の表情で目の前のポケモンを見つめるタクトは再びキュレムにりゅうのはどうを撃たせる。だが、結果は同じでアルセウスは1ダメージも受けていない。

「私の中には命の源と呼ばれる16の力がある。その中に最近、この少年と出会って数日経った頃の一つ、命の源が加わった」

それは妖精の命——後にフェアリータイプと名付けられるものであった。アルセウスやサトシ達も知らないタイプであり、ドラゴンタイプを無効にする力である。アルセウスは炎の命、妖精の命を用い、サトシを守り、さらにはキュレムの攻撃を全て受け止めた上で無効化してみせた。

「ば、ばかなありえない。そ、そんなこと……」

アルセウスの話を聞いたタクトは膝を着いた。そんなのまるで神ではないか。そのつぶやきは声に出ることはなくても、タクトの表情が物語っていた。

「サトシ、少し時間を貰っても良いか？」

「え？うん。もちろん、俺のわがままに付き合ってもらったし」

「そうか。ありがとう」

サトシに断りを入れたアルセウスは自分を見上げるタクトへと目を向けた。

「タクトと言ったな。全国各地から伝説や幻のポケモンを手に入れた手腕は見事という他ないだろう」

何を言われるのかと身構えていたタクトに送られたのは賛辞であった。あまりに唐突な褒め言葉にタクトは首肯する。

「だが、彼らには彼らのやるべきことがある。それを己の都合だけで捕まえるのは言語道断だ」

しかし、次に紡がれた言葉はタクトを咎めるものであった。

「彼らがいかにして伝説や幻のポケモンと呼ばれているのか。彼らには歴史に名を残すだけの力があるからだ」

人や普通のポケモンを凌ぐ力はもちろん、天変地異、時を超える、願いを叶える、宇宙空間を生きる、空間を歪める、反転世界を統治する、勝利をもたらす……。それらの当たり前から程遠い魔法や奇跡に等しい力を持つからこそタクトやサトシが使ったポケモンたちは伝説や幻と呼ばれている。

「そして、彼らには役目がある。争いをおさめる矛であり盾になる。海や空を守る。街を守る。その在り方はそれぞれだ」

ルギアが海の神と呼ばれていたり、ラティオスとラティアスが守り神と呼ばれているのはそれだけの理由がある。海の神と呼ばれるルギアがいなければオレンジ諸島の海は大荒れとなり、ラティオスとラティアスがいなければ悪意ある人によっては街は滅ぼされていたであろう。

「お前が捕まえたレックウザやレジギガスにも果たすべき責務があったのだ」

「け、けど、それは、あ、あいつも！」

震えた声でサトシを指さしたタクトにアルセウスは目力を強めた。

「サトシには私達から協力を申し出たに過ぎない」

だからお前と一緒にするなと目が語っており、その威圧感にタクトは尻もちを着いた。

「手に入れた経緯は聞かない。正攻法だろうが非道であろうが、その入れ物に入ったのは彼らだ。咎めはしない」

けれども、

「悪夢を見せるダークライや宇宙から来たデオキシス以外にはやるべきことがある。ラティオスには守り神として。レックウザには空の王として。レジギガスには神殿を守る者として。キュレムにはあの一帯を守る義務がある」

だから解放しろと、それを伝えるべくアルセウスはここまで待ったのだ。最初は手っ取り早くアルセウスのみでタクトを蹂躪するつもりだった。けれどサトシは自分達と戦いたいと、純粹で眩しい尊い気持ちをぶつけてくるのだ。それを無下にするならば、アルセウスは神と呼ばれる器を得てはいなかっただろう。そうして、サトシの願い通り最後まで戦い抜きアルセウスはその身を晒したのだ。

最も、タクトがサトシにも攻撃を当てようとしたことで、サトシが出すよりも早く出てしまい！かなり怒りを燃やしているが元氣そうなサトシを見てそれも和らいだ。

「この世に生まれてきたからには生きる理由がある。やるべきことがある。それを分かってくれ」

先程とは違った、諭すような穏やかな声のアルセウスにタクトは少し間を置いてゆっくりと立ち上がりじつところらを見つめるキュレムを見た。確かにダークライやデオキシスと比べるとキュレムやレックウザ、レジギガス達は捕まえにくかったように感じる。それは彼らがそこから離れられない理由があったからなのだろう。

「現に彼らがない事で大型の鳥ポケモンやジャイアントホールのポケモン達が暴れている。それをおさめるために私が毎回赴いて裁き

を与えるわけにもいかないのだ」

「……わかった。ダークライとデオキシス以外は元の居場所に帰ってもらう」

渋々といった様子で頷いたタクトにアルセウスとサトシの表情が和らぐ。

「ならばよい。私の役目はここまでだ」

アルセウスはサトシの方へと視線を向ける。すると、サトシは審判に向かってこう言った。

「俺、棄権します」

###

「オイオイ！どういうことだよサトシ！」

「そうよ！あと少しなのよ!？」

「お前、ふざけているのか!!」

審判に向けて棄権する旨を伝えた時、飛んできたのは疑問と罵声が混じった知り合いからの言葉の嵐であった。

「サトシ、一体どうしたんだ」

これには1番長く旅を共にしてきたタケシも困惑していた。セキエイこうげんでの敗退での雪辱から今までポケモンリーグで優勝することを目的としていたことをよく知るタケシはサトシがあと一歩

という所まで来たというのにそれを投げ出すのが納得できなかった。それは彼とバトルをしたシンジやジュンも同じである。

「いや、ここまで来れたのはアルセウス達のおかげであって、俺の力じゃないからさ」

そう言つてサトシはアルセウス、ピカチュウを見て、そしてモンスターボールの中で休む仲間達を労うようにモンスターボールをさする。

「もし、ミュウツーが来なくて、あのままのメンバーで行つてたらきつとキュレムの姿は見れなかつただろうし」

ポリポリと頬をかいて笑うサトシにタケシは言葉を失うもヒカリは口を開いた。

「でも、みんなが来てくれたのはサトシだからでしょ？だからこれもサトシの力なんじゃないかなー」

「……ありがとヒカリ。でも決めてたことなんだ」

ミュウツー、ラティアス、ギラティナ、ピカチュウ、ルギア、アルセウス。こんな夢みたいなメンバーで戦えるのは今回だけ。ならば存分に楽しんでそのあとは素直に敗退を認めようとサトシは心に決めていたのだ。

「タクトさんは自分でゲットして、自分で育てたポケモンでここまで来たんだ。それを今回だけみんなの力を借りて何もしてない俺が決勝に行くのはダメだと思ふんだ」

サトシはそう言つてヒカリ達から背を向けるとタクトへと瞳を向

けた。

「タクトさん本当にありがとうございます。今日のこと、俺は絶対忘れません！」

「……待てサトシ」

そうやって深くお辞儀をしたサトシはトレーナーが立つ位置から離れて、スタジアム内部へと姿を消そうとする。しかし、それをアルセウスが止めた。

「お前の潔さは褒めるべき美德だ。お前のおかげで私はまた人を信じることが出来た。改めて礼を言おう」

「え、あ、うん。なんか照れるな……」

「そして、これはその返礼だ」

首をかしげるサトシにアルセウスは自分が現れてから雲ひとつなくなつた晴天の空を見上げる。

「人にはお前のように心優しくポケモン達に愛を向ける者もいれば、己の私利私欲のためにポケモンを手に入れる不屈きな者もいる」

そう語りながらアルセウスの頭部にエネルギーが集中していく。

「私はそのような者が許せない。だから、タクトがそのような人間でなかつたことを本当に心嬉しく思う」

なお、エネルギーの集中は止まらず、サトシやタクトは一体何を見てるのかとアルセウスが見やる方へと視線を向ける。

「しかし！コソコソ隠れて！我々が疲弊したところを狙い！ポケモンを奪おうとする下賤な輩には！私、自らさばきを下してやる!!」

怒号と共に繰り出されたさばきのつぶては何も無いはずの空で爆発し、その場所からは黒煙が上がる。すると、狼煙からどんどん黒い巨大なコンテナのような巨大な船が現れる。その船をサトシは知っていた。

「まさか！」

シンオウ地方に来て、何度も遭遇したロケット団よりもどす黒い悪に染まったポケモン強奪、捕獲、売買を行う集団。そして、狼煙からボーマンダに乗って現れたトレーナーを見てサトシは叫んだ。

「J!!」

シンオウ地方ポケモンリーグ準決勝はサトシの棄権で幕を閉じることと思われたが、アルセウスの一撃により姿を現したポケモンハンターJ。彼女の目的は？そして、ポケモンリーグは一体どうなってしまうのか…

……To be continued

神の鉄槌

シンオウリーグスズラン大会の会場に突如として現れたポケモンハンターJ。その姿に驚くサトシやヒカリ、タケシの額に汗が動いている。

ポケモンハンターJ。女性と成人済であるということ以外は本名・出身地・素性が一切不明とされている。

冷酷非道な性格であり、目的のためなら手段を選ばず人やポケモンを傷つけることも厭わない。時には部下すら犠牲にする大悪党である。

シンオウ地方をステルス機能のついた飛行艇で動き回り、Jの左腕部についた特殊な機械から照射させる光線にはポケモンを石化する能力が宿されており、捕獲したポケモンはショーケースに入れて依頼者へと売り捌いている。

そして、彼女がこれまで多くの罪を重ねながらも捕まらないのは高い知力に知識、狡猾さにある。ネームバリューのあるトレーナーが邪魔に入った時は決して長期戦をせず、目的を完遂したら速やかに退却する。それを可能にするのは彼女のボーマンダのスペックの高さと、そのボーマンダの上で姿勢を崩さずに乗っけられるJの身体能力にもある。

しかし、彼女は死んだはずであった。ギンガ団と名乗る新たな世界の構築を望む集団に、伝説のポケモンであるアグノム、エムリット、ユクシーを捕獲する依頼を受けた彼女はその依頼通りにユクシーとエムリットと捕獲した。だが、捕まえられる寸前に放ったみらいよちがJの艦艇を破壊。その爆発に巻き込まれ湖の彼方へと沈んでいたはずだが。

その事はサトシ達も国際警察であるハンサムからギンガ団事変の後にある程度は聞いていた。しかし、バイザーや黒い装束に包まれていて傷や火傷などの外傷は見えず五体満足でボーマンダの上に立つ

Jを見て息を呑む。

「どうしてお前がここに！」

「ふん、こうして伝説のポケモンが1匹も集まっているのだ。治療費や新しい船を作るのに随分と無理をしたからな」

サトシの問いかけに不遜な態度で答えるJ。彼女は今までの報酬金で巨額の貯蓄があったものの、船の爆発に巻き込まれて出来た傷は決して小さくはなく、さらには船の建造費と合わせて貯金のほとんどを持っていかれてしまった。それゆえ、彼女の今回の目的はポケモンバトルで弱った伝説のポケモン達を一気に捕獲しマニア達へと売り捌くことであった。

「けど、そもそもどうやって命拾いを……」

「存外、この私もポケモンに愛されていたということなのだろうな」

呟くように言ったタケシの言葉をバイザーひに仕込まれた集音マイクで拾ったJはさらりと答える。その手にはモンスターボールが握られており、中にはギャラドスが入っており、どうやら、沈みいくJを助けたのは水中に潜むポケモン捕獲のために使っていたギャラドスらしい。

ただ、ポケモンに助けられてもポケモンに対する愛は芽生えずこうしてまた悪事に手を染めていることからまだ死に足りないのだろう。

「さて、話は終わりだ……ちつ、また船の修理費がかかるがそれは貴様ら売り払ってからゆつくりするでしょう」

アルセウスの攻撃により再建造した船からは狼煙が上がっており、滞空しているのもやっとなであった。中ではこれ以上の被害を防ごう

と水タイプのポケモンによる消化作業が行われており、さらにはJを助けようと部下たちがパラグライダーで地上へと降り立ちモンスタートボールを投げていた。

「ゆけ、サイホーン！」

「ハッサム！」

「J様を助けろココドラ！」

部下たちの出したポケモンはどれもこれも重量級、または悪役顔の整ったポケモン達でその数は楽に50匹を超えている。その数にはHPが満タンのキュレムがいるタクトでも汗を滲ませるほどだ。いくら伝説のポケモンといえどもタイプが異なり、軒並み防御力が高いポケモンばかり並べられちまちまと攻撃されればタダでは済まない。それにタクトにはキュレムしか戦えるポケモンがない。普段ならその程度と押し切れるのだが、先程普通のポケモンと舐めていたピカチュウに意表を突かれたばかりの彼にとってはどんなポケモンも警戒するに値する。

「……ポケモンに助けられたのに、またポケモンを傷つけるのか？」

一方のサトシは、アルセウスと同じく憤怒の顔が浮かんでいた。これまでJと遭遇する度に彼女のハンティングを阻止してきたサトシは彼女の卑劣さ狡猾さをよく知っている。どれだけのポケモンとトレーナーを傷つけてきたのかも知っている。それは自分のピカチュウを捕らえられたこともあるので身に染みて知っている。そして、ポケモンに助けられたというのに彼女が未だにポケモンを傷つける行為を繰り返そうとしていることに苛立ちを感じないはずはなかった。

「傷つける？…何のことだ？裕福な家庭に送られ、宝物のように重宝さ

れる方がポケモン達にとつても幸せだろう?」

口角を歪ませ軽薄な笑みを浮かべるJにサトシは拳を握った。

「そんなはずあるわけないだろ!」

「お前の意見など聞いていない」

消えろ。そう言ってボーマンダへ攻撃命令を下そうとした瞬間に、Jに全ての身の毛がよだつような恐怖が襲いかかる。なんだこれはと慄くJの視線の先には、自らの船を撃ち落とそうとした憎きポケモンが映っていた。

「貴様か。名は知らんが、お前も伝説のポケモンなのだろう。売れるかは知らんが捕まえてやる」

その行為をシロナは愚かだと思った。時として知らないということはある意味幸せであり、一種の不幸なのだ。

アルセウスという世界の創造主とされ、神に等しい存在を知らないことは罪ではない。けれども、知らずに神を冒瀆するのは蛮勇に値する。

「やれるものならやってみるがいい」

「そうさせてもらおうさ」

神が静かに怒りを滲ませながらそう言うと、愚者は左手の照射装置を神へと向けた。そこから放たられる光線の力を知るサトシは神を見上げた。

「案ずるなサトシ。ここは私に任せるといい」

優しいな声音で窘めたアルセウスは向かってくる光線に対して、守る手段を用いなかった。しかし、その光線は突如消えてなくなる。

「…なに？」

まるで空間が屈折し、そこへと吸い込まれていったかのように消えていった光線にJは疑問を抱く。しかし、アルセウスは微動だにしておらず何かをした素振りもない。

身体や機械に不調はない。高い金を出したのだからそれは当然だ。ならば、やはり問題があるのは目の前のポケモンにあるのだろう。だがその原因の見えないJは、捕獲の方法を切り替える。

「やれドラピオン、アリアドス。あのポケモンを戦闘不能にしろ」

モンスターボールを地面へと投げ、そこから飛び出した2匹にそう命令を下したJはアルセウスからキュレムへとターゲットを定める。

「先にお前だ。」

ノータイムで放たれた光線は一直線にキュレムへと向かっていく。今度は空間が歪んだりすることも無くキュレムへと辿り着くかと思いきや、突如動き出し素早さを増したキュレムに躲される。

「な……………ん……………だ……………と……………?？」

おかしい。この光線は伝説のポケモンといえどもそう簡単に避けることは出来ないはずと思ったと同時に、自分の身体の異変に気付く。思考と行動の時間に齟齬が生じており、さらには視界の中でのトレーナーやポケモンの動きがおかしい。具体的に言えば、ビデオなどで2倍速再生をしたかのように、行動が機敏すぎるのだ。それに対し

て、自分の話す速度や脳に命令してから実行へと移すのにはいつもの倍は時間がかかっている。

「ま……………さ……………か……………」

「そうだとも」

違和感の正体に気付いたJにアルセウスはゆっくりと、彼女にも聞き取れるような速度で話し出した。

「彼らの力を使って貴様の動きを制限させてもらった」

アルセウスの後ろには力を使っているのであろうその彼らが姿を現していた。1匹は青色の皮膚の上に鉄のように銀色に輝く堅殻をつけ、その中心部にはダイヤモンドがキラめいている。そして、もう1匹はうっすらとしたピンク色の表皮を持ち、肩にはパールのような輝きを放つ宝石のついた羽の生えたポケモンがいた。

その姿を見て視界の端で観客の避難誘導を行っていたであろうチャンピオンが目を輝かせているが、そんなことはJの中では問題ではない。

「これがお前の愚弄したポケモンの力だ」

気付けば、ドラピオンとアリアドスはスタジアムの壁面に叩きつけられており、部下の出したポケモン達も死んではないものの部下と共に地面へと倒れ伏して気を失っていた。

「さあ、裁きをうけるがいい」

この瞬間、Jは初めて後悔というものをした。あのまま死んでおくべきだったかと。

あの時ギャラドスが助けなければ、こうして自分が絶望の淵に立たされることもなかったのだ。生きているから欲が出て、ポケモンを売り捌くことで大金を手に入れられると知っているから、こうして伝説のポケモンが一堂に会しているこの場に来てしまった。空に浮かんだ光の弾が弾けて、礫となって自分や飛行艇に降り注いでくる。

ああ、全てポケモンのせいだ。ポケモンがいなければ自分は悪人にならず、全国に指名手配されることもなく、裁きを受けることもなかったのに。

そんな愚かしく哀れな感情を抱いて、Jの意識は事切れた。